

資本蓄積論

——リカアドオ理論を繞つて——

天利長三

- I 「分配論」の脊後に描かれている資本蓄積論的構想
- II 動態分析の基礎理論の性格
- III 原始経済から静止状態にいたる社会進歩の構図
 - (イ) 社会発達の初期における無限擴張経済のモデル
 - (ロ) 轉換期から衰退期にいたる経済のモデル
 - (ハ) 静止状態の様相
- VI 結論

I

1
「一世紀にわたつて、マルサスの研究方法が、殆んど完全に抹殺され、リカアドオのそれが、完全に支配してきたことが、経済学の進歩にとつて、如何ほど不幸であつたことか。リカアドオに代つて、マルサスのみが、十九世紀に

資本蓄積論

おける經濟學發展の母體たりえたとしたら、世界は今日いかほど賢明にして、またより豊かとなつたことであろうか。^{*}この嚴しいリカアドオ批判は、實は、それが一つは、抽象的な理論構成に終始したということ、いま一つは、均衡状態における生産物の分配法則を追求したというケインズの解釋にもとづくものではあるが、ヨリ根本的には、資本主義經濟の沈滞期にあつて、自ら熾烈な問題意識を抱いていたケインズによつて、リカアドオの基本的な態度——抽象的な長期的な理論展開にたいする不信から導きだされていることは、想像に難くない。リカアドオ自ら認められているごとく、彼はその思索を、つねに事物の永久的な状態に限り、理論を展開するにあつても、直接的な現實的な結果についての細かな追求は、あえて顧みるところなく、むしろ直截にして明確な結論を導きだすところにあつた。また、そのねらう長期均衡的な分析は、動因を通じて實現されうる經濟進歩乃至富の増進の可能性を無視するかのごとくであつて、例えば基礎原理としての價值にしる、また、分配の面における賃銀・利潤・地代にしる、その觀點はあくまで關係的把握というところに、力點がおかれていることは否み難い。このようにみてくると、たしかにリカアドオの理論は、市場價格のシステムを中心とするものといひるのであつて、富の増進を眞向からとりあげているマルサスとまさに對照的であるといえる。^{**}ケインズをして慨歎せしめたのも、もとをただせば、このようなリカアドオにおける物中心の客觀化せられた世界のメカニズムの法則理論の支配をみてとり、リカアドオ以後の文献から *great puzzle of Effective Demand* の問題が姿を消したとみるところにある。^{***}

* J. M. Keynes; *Essays in Biography*, 1933. p. 141, p. 144, pp. 139—40, *General Theory*, 1936. pp. 32—33, p. 3 note.

** 高橋泰藏著「經濟發展と雇傭問題」四頁・一一一—一一九頁参照。

*** ケインズの上述の引用文につづいて、ケインズの銜先は、リカアドオ体系にたいするといふよりも、むしろ Say's Law に向けられていることからして、ケインズにおいては、セイの法則がリカアドオ体系の基礎的前提であつたとみているかのごとく

てある。

R. F. Harrod をまづきまでもなく、リカードオの「分配論」をば、均衡理論として、經濟諸量の關係的把握のみに終始しているものとして性格づけるよりも、むしろ macro-dynamic class-distribution analysis として——すなわち、「ある一時點において、生産物が生産要素の間にかかる割合で分配せられるかを決定することではなくて、生産物が生産要素の間にいかに繼續して再分配されていく」かを追求したものととして汲みとることができ*。そして、このような解釋をヨリ重視せんとするは、「分配論」を經濟学の主要課題とこころえ、社会の生産物が生産に參加した諸階級の間に分割せられる割合が「社会の發達の種々なる段階において」如何に異つてくるかを、形而上学的・倫理的な考察を離れて、純粹に因果的に考察せんとしたりリカードオの思考が、土地の生産力・資本蓄積・人口・技術 (Principles, Works, Vol. I p.5) の諸條件によつて強く左右されていること、とくに、耕作の進むにつれて、收穫の遞減する土地と、生活に余裕ある限り、その限度まで増殖せんとする人口が、根本的に分配を左右することを認めているからにほかならない。このことは、リカードオの究明せんとした地代・利潤・賃銀の natural course の意味内容が、土地の生産力を制限する自然の法則 (ibid., p. 126) を基盤としつつ、これらのものがその長期的な經濟發展の過程においてとる變動の姿であつたことからも明かである。いま經濟の進化の過程におけるこれらの相互關係の推移を素描すれば、おおよそ次のごとくみることができ。リカードオにとつては、地代ではなくて、利潤が、國富増進乃至國民的繁榮の第一の徴候であり、また刺戟でもあつた。したがつて、資本家階級の利害こそ、社会そのものの利害であり、この階級の繁榮こそ、資本の蓄積と、生産的産業の獎勵とを導くものであつた。かくして、もし肥沃なる土地が限りなく存在しているとすれば、この本源的な動機としての利潤をもといとして、蓄積への傾向によつて拍車が増えられ、社会は進歩し、そのやむところを知らない。ところが資本の蓄積にともなう人口の増加は、食物に

たいする需要を増進せしめ、これに應ずるため、新たに未開の土地に資本を投するか、或いは既耕の土地に重ねて資本を投することを余儀なくされる。その結果として、收穫は以前に比して減少し、賃銀は騰貴し、利潤は減少する。ここで、以前の土地收穫から、賃銀とこの減少した利潤の和を控除した余剰として地代が発生する。社会の發展は、ここにその轉換期が劃され、さらに、資本が蓄積せられ、人口が増加すれば、ヨリ生産力の劣つた土地が耕され、利潤はヨリ下落し、他面においてそれだけ既耕地の地代が騰貴する。この過程が繰返されていくにつれ、利潤率がある程度以下に低下すれば、すべての刺戟は失われ、資本の蓄積が廢せられ、労働にたいする需要の増進もやみ、人口増加の刺戟も消滅して、ここに發展なき、Stationary State が出現する。——このような構想が、すなわち、人間の要求にたいする自然力の減退過程を繞る悲觀的な經濟發展の構想が、その「分配論」を支えているとみることができ^{**}る。われわれは、以下において、このようなりカブドオの經濟發展の理論をヨリ詳細に吟味したいと思う。

* R. F. Harrod; *Towards a Dynamic Economics*, 1948. pp. 15—16.

** リカブドオの「原理」の解釋については、その論述を不秩序であるとし、その内容をヨリ論理的なる順序に置きかえんとする試みもなっていない。しかし、われわれの立場からするとき、その試みは殆んど承服できない。(小泉信三著「アダム・スミス・マルサス・リカブドオ」四四〇—四四六頁)

なお本稿におけるリカブドオよりの引用は、Piero Sraffa と M.H. Dobb の編纂による *The Works and Correspondence of David Ricardo*, 1951 より、*Notes on Malthus* と略稱する。因みに、その全集は、次の九巻からなつてゐる。Vol. I, *Principles of Political Economy and Taxation* Vol. II, *Notes on Malthus* Vol. III, *Pamphlets and Papers*, 1809—1811 Vol. IV, *Pamphlets and Papers*, 1815—1823 Vol. V, *Speeches and Evidence* Vol. VI, *Letters*, 1810—1815 Vol. VII, *Letters*, 1816—1818 Vol. VIII, *Letters*, 1819—June 1821 Vol. IX, *Letters*, July 1821—1823

Piero Sraffa は、適切にも、リカードオが興味をもつた価値の問題が、生産物の分配の変化にたいして、不変な価値尺度をもとめるところにあつたと指摘しているが、(Works, Vol. I pp. XVIII—XIX) リカードオの巨視的動態理論における価値原理の役割は、分配の変化に直面して、異種の貨物の全體の量における変化を可能ならしめること、すなわち、その不変物を探求するところにあつたとみるべきであろう。にもかかわらず、その説くところを徹細に検討するとき、その理解について尠からざる困難をおぼえしめる點がないではない。^{**}まず第一は、absolute (real) value と exchangeable (relative) value との関係である。第一章価値論の冒頭における、'The value of commodity, or the quantity of any other commodity for which it will exchange, depends on the relative quantity of labour which is necessary for its production, and not on the greater or less compensation which is paid for that labour' という一節は、それにつづく叙述から、その含蓄を汲取るならば、ここでいう貨物とは、個々の貨物ではなくて、農産物とか製造品とかいう大きな部類を意味し、しかもそれは労働によつて任意にその數量を増加しうるものであつて、その生産に競争が無際限に作用するものであり、その価値とは、交換価値、相對價值(自然的交換比率)であつて、それは相對的な労働量に almost exclusively に依存するというふうに理解されねばならない。貨物の相對價值が、ここでの問題である限り、それに含まれた労働量は、ただ貨物が相互に交換される分量關係の單なる指標にとどまり、労働量が価値を形成する實體でない (ibid., pp. 46—47) ことは、リカードオの例證をまつまでもなく想像されるところである。しかも、ここでいう含まれた労働量とは、人間エネルギーの支出として客觀的にとらえられるもので、それは生産の難易の尺度でもあり、ただに一物の生産に直接投入せられるもののみでなく、間接的に資本に投ぜられたものをも含む (ibid., pp. 22—23) ことも理解できる。ただここで彼が、資本の價值移轉の速度の遲速をば、資本の耐久性の強弱と同一視している嫌のあることは、見逃しえないところである。ともかく、

リカアドオは、第一章「價值論」において、スミスのごとき、貨物の價值が労働の價值（労働の報酬）に依存するとみる支配労働價值原理と袂をわかつて、労働の生産力に變化のない限り、貨物の相對價值は、不變のあたえられた大きさであつて、賃銀——労働の價值——と利潤とにわけられる割合が如何ほどであるかは、貨物の相對價值にいささかも關係を及ぼすものではないという原理 (*ibid.*, p. 17, p. 28, p. 29, p. 105) を導きだしてくるのである。ところが、第二〇章「價值と富」において、絶對價值（眞實價值）について語り、貨物の價值は、その生産に必要な労働量によつて定まること、すなわち、あらゆるものの價值は、その生産に使用される労働量に比例して騰落し、(*ibid.*, p. 273) 二つの貨物の交換比率が不變であつても、それぞれの價值は變化しうることを示し (*ibid.*, p. 277) 價值が交換比率とは全く異なることを明言している。しかし、第一章「價值論」において、異質労働の等質化というこの絶對價值の根本問題にふれているところでは、スミスと同様に (*Wealth of Nations*, Book I, chap. 10) この問題の處理が簡單に市場の評價にゆだねられ、労働の比較的熟練と強度の *scale* は、ひとたび形成せられると、あまり變動することなく (*ibid.*, p. 200)、兩時代において、ひとしく作用するから、殆んど顧慮する必要もなく (*ibid.*, p. 21)、短期間においては、諸貨物の相對價值のうえに殆んど影響を及ぼすことがない (*ibid.*, p. 22) とみている。このようにみてみると、果してリカアドオが、交換價值を絶對價值の發現状態とみていたか否かについて、疑問の余地がのこるのであるが、リカアドオの關心があくまで貨物の相對價值の變動の結果にあつて、その絶對價值の變動に關するものでなかつた (*ibid.*, pp. 21—22) ともいえよう。しかし、商品價值自體の問題をこのように二義的なものとして、その分析が不徹底におわつている點が、のちに述べるごとく、彼の價值尺度論に一つの問題點を残したことは否み難い。

* リカアドオの價值に關する論述は、次の諸章、すなわち、一章價值、四章自然價格と市場價格、一八章價值と富、その差別を示す諸性質、二六章富國及び貧國における金・穀物及び労働の比較價值、二八章需要供給の價格に及ぼす影響、であるが、とく

に價值概念の明確にされているのは一八章である。

※ 原論完成の前年に、リカードオが Malthus に送つた書簡には、私は私自身を満足せしむるにすぎぬまでも、私の理論に一貫せる形態をあたえるまで研究をつづける決意を披瀝しているが、リカードオを最も悩ました價值尺度についての主張・反駁が彼の病死の日までつづけられたことは、Letters of Ricardo to McCulloch, Letters of Ricardo to Malthus の書簡がこれを明かにしている。

*** リカードオの労働價值についての所説は、極めて曖昧で、労働なる貨物には、彼の價值原理が適用しうるかのごとくであつて、そうでもない。例えば、一面では、それは、需要供給關係のみならず、食料その他必需品の價格の變動によつて影響される (ibid., p. 15, p. 93) としつつ、他面では、貨銀が労働の需給によつて影響されるといふ Buchanan の説を否定している。 (ibid., p. 382) なお、労働の價值をば、労働の交換價值とみ、それを貨銀と解する限り、リカードオのみのごとく、貨銀の單位としての貨幣の購買力が一定不變でありえないことになり、労働が價值尺度たりえないということになるのであつて、ここに彼の貨幣價值の理論が労働價值原理から離れて、數量説へつながる通路が開かれていたといえる。

*** 波多野鼎氏は、リカードオが労働の質的差異の等一化、その量的差異への還元をすることができなかつた点に、彼が眞實價值とは異なる相對價值へ逃避した根本の理由をもとめる。(波多野鼎著「正統學派の價值學說」第一卷、一一五頁以下參照)

次に、問題となるのは、稀少性價值原理についてのリカードオの態度である。すでにみたごとく、彼は労働價值原理にたち、ややもすると需給論を誤謬とすることがとき口吻をもらしているが (ibid., chap. 30)、稀少性價值 (獨占價格) 原理を無視しているわけではない。ただ兩者に關係のなきことを説くのである。すなわち、任意にその數量を増加しえない貨物、例えば葡萄酒、植林の例にみるごとく、それらは、その稀少性によつてのみその價值が決定せられ、これらの價值は、生産に要した労働量とは全く無關係に、これを得んとするものの資力と嗜好との變動とともに變動し (ibid., p. 12)、その交換價值は生産費に制約されず (ibid., p. 250)、需要供給の法則によつて決定されるとみる。 (ibid., p. 385) では、需要が價格のうえに一時的な影響をもつことを認めつつも、なおかつ、任意に増加せしめう

るような貨物の價值が需要で決定されぬというのは何故であるか。實は、ここにリカアドオの理論的立場の著しい性格があるのであつて、つまるところは、永續的な作用に重點をおくことにあつたからである。一應、貨物の價值を決定するものが、何れの場合においても、需給間の比例であるとき、それが一般的には、その市場價值に影響することがあつても、勞働投下によつてその供給量を増加しうるものについては、その價值と一致しないような需給關係の持續は、たといそのような關係が発生しても、一時的で永續しないとみる。というのは、供給は踵を接して需要に追隨し、たちまち價格を左右する力をば、自己の掌中におさめ、交換比率が費された勞働量に比例するような需給關係をつくりださずにはおかないからである。このようにみようと、リカアドオの價值原理は、自由競争を前提として、はじめで承認しうるものであり、したがつて、その全理論の前提には、資本と勞働の移動の自由が約束されているのであつて、のちにみる利潤率の平均化の思考も、これと同一の立場にたつものといえる。^{*}(*Ibid.*, pp. 41—42, p. 88, pp. 119—120)したがつて、獨占財、或いは競争の不完全な場合、例えば、二國もしくはそれ以上の國の間に交換せられる貨物については、價值原理は妥當しないとみる。(Ibid., p. 133)

^{*}この点に關するリカアドオの敘述は、次のごとくである。すなわち「趣味の變易、または人口の増減からおこる需要變動の多様な事態のもとにおいて、貨物の供給が、その必要量において規則正しく行われ、しかも供給の過剩より生ずる飽充という結果も、供給が需要に及ばないための高價格という結果も見受けられない」と。(Ibid., pp. 89—90)

第三は、Civilized country における投下勞働價值原理の妥當性如何の問題である。スミスが、early and rude state of society における價值原理としての投下勞働量の原理が、土地の私有・資本蓄積のおこなわれる文明社会では、しかく單純とはいかぬところから、支配勞働原理への變説を試みたのにたいして、リカアドオはあくまでも投下勞働價值原理の歴史的な妥當性を疑わないで、その一貫性を強調する。しかし、文明社会においては、等額の資本が

つねに等額の利潤を生むという平均利潤率の法則と、その価値原理とは矛盾する。この矛盾を解くために、彼は、まず、生産上に費された労働量の増減のほかに、賃銀の騰落も、また貨物の交換価値に影響することを認め (ibid., p. 30)、このような變動を生ずるのは、諸貨物の生産上に用いられる固定資本と流動資本 (賃銀) との比率に異同あるか、或いは固定資本の耐久力に異同がある場合であるとみて、三つの例證 (ibid., p. 33, p. 34, p. 37) を試みるのであるが、つまるところ、このような矛盾の生れる根據は、資本が投ぜられて回収されるまでの時間、或いは商品が市場にもたらされるまでの時間が同一でないという點にもとめられている。 (ibid., p. 34) すなわち、貨物の価値は、それに體化された労働量のほかに、時間という新しい要素をもつことを説き、価値におけるこのような差等が、利潤が資本として蓄積せられるところより生じ、利潤が保留された時間にたいする正當な償いにすぎないとするのである。 (ibid., p. 37) かくして、貨物の相對價值を左右する原因は、一でなく二であること、すなわち、その貨物の生産に必等とする相對的な労働量と資本が睡れる時間 (貨物が市場にもたらされるまでの時間) にたいする利潤とであるという。しかし、このような利潤は、投下労働の基本原理において、彼が賃銀の騰落が価値に影響しないとみた場合の貨物價值分解分としての利潤、すなわち、^{***}賃賃と密接な關連をもつものではなく、それはあくまで、すべての産業部門を通じての平均利潤であるべき筈である。^{***}このようにみると、リカアドオは、まず第一に、その價值原理の展開を個別利潤を含む貨物の價值からはじめ、ついで平均利潤を含む貨物の價值に、換言すれば、その交換價值から他のものへ轉化せしめたとみられるのであつて、これこそ、彼のいう natural or necessary price である。^{***}かくして、任意に増加しうる貨物は、その生産に参加した労働の賃銀と資本の利潤との合計をその自然價格として交換されるという結論となるが、リカアドオによる分配と交換の自然的状態とは、まさにこれを指している。これを別の面からみれば、貨物の價值は、賃銀に平均利潤を加えた生産費をもつてあらわされ、利潤率の平均した時こそ、貨物が體現労働量に比例して

交換される時と説くものとみてもよいであろう。つぎには、この自然價格と労働の價值を同一視して、賃銀の騰落、したがつて利潤の高下が、^{*****}異つた影響を及ぼすという修正を展開する。すなわち、およそ如何なる種類の貨物でも、それに使用せられる資本の耐久性の程度に比例して、かかる耐久資本の投ぜられたものの相對價值は、賃銀と逆に變動し、賃銀の騰貴するときに下落し、賃銀の下落するときに騰貴する (ibid., p. 34) のに反して、主として労働によつて生産され、僅少なる固定資本、または耐久性乏しき固定資本をもつて生産せられるものは、賃銀の騰貴とともに騰貴し、賃銀の下落とともに下落するであろうと説くのである。(ibid., p. 33) 以上は、リカアドオの試みた文明社会における投下労働價值原理の修正論の主要であるが、それにもかかわらず、生産に全く機械を用いず、労働のみを使用し、またその貨物を市場にもたらずまでに、同一時間が経過するとか、同一の耐久性ある固定資本を使用するとかいう場合には、分業の進み、商工業の發達せる社会においても、その交換價值は、生産に投ぜられた労働量に比例するという基本原理は、依然として眞理であると説いてやまない。(ibid., pp. 24—25) このような意圖は、恐らく、前述の修正の意義を輕視することによつて、自説の理論的首尾一貫性を維持せんとするところにあるかのごとくであつて、例えば、賃銀の騰貴による利潤低下にともなう相對價值の變化が比較的輕微であり、(ibid., p. 45) 永續的な利潤率が著しき程度において變動するのは、年月をまつて始めて作用する諸原因の結果であるが、貨物の生産に必要な労働量の變動が、日常生起する事柄である (ibid., p. 36) というのも、そのように解して大過ないであろう。

* ここでリカアドオが、資本の耐久性の相違を、生産期間の長短と同一視し、固定資本と流動資本の構成の問題をば、時間の問題に轉化していることは、とくに注目に値する。

** 價値要素としての市場にもたらされるまでの時間についての記述は、全集第一卷二三・三一・三四・三七頁参照。これはマルサスのいう varying quickness of return であるが、この時間の経過にたいする償いが、貨物の交換價值と、費された労働にたいする賃銀との差額である意味において、(ibid.) W. N. Senior の Abstinence の思考の萌芽がみられるともいえる。この三つの例証を圖解すれば、次のごとくである。

〔例證 I〕

	織物業者		紡績業者		農業者	
	固定資本	流動資本	固定資本	流動資本	固定資本	流動資本
第1年度	0	100人	0	100人	0	100人
第2年度	機械 ←	100人	機械 ←	100人	0	穀物

第2年度末の各生産物の均衡價值
 1人當り £50とすれば 布 = £1,000 + r 縮製品 = £1,000 + r 穀物 = £500

〔例證 II〕

	織物業者			紡績業者			農業者		
	固定資本	流動資本	平均利潤率	固定資本	流動資本	平均利潤率	固定資本	流動資本	平均利潤率
第1年度	0	£5,000	10%	0	£5,000	10%	0	£5,000	10%
第2年度	£5,500	£5,000	10%	£6,050	£5,500	10%	0	£5,000	10%

〔例證 III〕

	甲				乙			
	固定資本	流動資本	利潤率	生産物	固定資本	流動資本	利潤率	生産物
第1年度	0	£1,000	10%	£1,100	0	£2,000	10%	£2,200
第2年度	£1,100	£1,000	10%	£2,310				
第2年度末	40人 = £2,310				40人 = £2,200			

*** *ibid.*, p. 40, p. 72, pp. 119—120 についての平均利潤の成立が、資本家間の競争を起動力とし、市場價格の騰落を媒介としてあらわれることは、つぎの引用から明らかである。「貨物の市場價格が引續き久しく遙かにその自然價格(貨物の交換價值)以上にも以下にも留ることを妨げるものは、各資本家がその基金を比較的不利の用途より、有利の用途に轉せしめんとする欲求である。諸貨物の交換價值をば、その生産に必要な賃銀と、使用せられた資本をその効力の原狀に復せしむるに要せられる他の一切の消費とを支辨した後、remaining value または、surplus が各業において使用せられた資本に比例するように調節するものは、實はこの競争である。」(*ibid.*, p. 91)

*** 市場提供に要する時間の長短に應じて配當される利潤と、分解分としての利潤との區別は、リカアドオにおいては必ずしも明瞭でなく、また、自然價格についても、その意味するところは區々である。それは、(イ)生産費としてそのうちに平均利潤を含むものであり、(ロ)生産に必要な労働量(價值)であり、(ハ)市場價格變動の中心点でもある。例えば、すべての貨物がその自然價格にある結果、すべての職業における資本の利潤は、正確に同一率にあるとし、(*ibid.*, p. 90) 或いは、自然價格とその生産に必要な労働量を同一視し(*ibid.*, p. 88) 或いは常に何らかの「一時的・偶發的原因によつて妨げられなかつた場合に、それの働べき力、それが自然價格である」とみている。さらにリカアドオの生産費概念についても、同様であつて、(イ)總労働量(直接労働と間接労働) (*ibid.*, p. 40) と、(ロ)賃銀と平均利潤 (*ibid.*, p. 47, p. 406) との二様の見解がある。

*** M. Dobb が指摘することく、「賃銀の上昇するとき利潤が下落する」という叙述は、それだけ切り離してみると、tautology 以外の何ものでもない。しかし、リカアドオ体系でそれを用いると、「利潤は貨物一般の價值に對する労働力の價值の比率によつてのみ決定される」という意味をおびる。すなわち、この比率は、労働者の生活資料の生産に向けられねばならぬ社會の労働力の比率に大体ひとしよものである。(Maurice Dobb; *Political Economy and Capitalism*, 1950, p. 46)

さて、このような價值原理の考察から、進んでリカアドオの動態的分配理論の基礎としての不變の價值尺度論に向つてみよう。リカアドオは、まず、労働量と労働の價值とを區別し、労働の價值がその全生産物でないことをみ、支配労働量が價值尺度であると考へたスミスの所論を(*ibid.*, pp. 14—15, p. 19) とりあげ、支配せられる労働は、物の尺度にかくべからざるそれ自體の不變という要件を備えていないという。ここでリカアドオのいう價值尺度の不變とは、

あらゆる時において、それを生産するに同一の辛勞と勞働を要することを指しているのであつてもし、この不變の標準があれば、自然交換率の變化が交換される貨物のどちらにあるかを容易に確かめうる筈であるが (*ibid.*, p. 28, p. 46)、彼にとつては、如何なる貨物も a perfectly accurate measure of value の資格をもちえないのである。その根據は、(1)改良などによつて、貨幣の生産に要せられる勞働の量が常に變動すること、(2)貨幣と他の貨物との間に、固定資本の割合を異にすることによつて、賃銀騰落からおこる相對價値の變動があること、(3)貨幣とそれと比較せらるべき貨物とに投ぜられた固定資本の耐久性の異なるために、同じ原因によつて變動することがあること、(4)貨幣を市場にもたらすために要せられる時間は、その變動の測定されるべき他の貨物を市場にもたらすための時間に比して長短があること (*ibid.*, pp. 43—44) にもとづくのであつて、要するに、その生産に常に同一の勞働を要する貨物がなく、したがつて不變の價値尺度は存在しないといふことができる。^{*}このように、價値尺度の發見・確定の困難を、不變の價値をもつ貨物のもとも難いところに見る點から推測されることは、彼が價値尺度たるものは、それ自身價値をもたなければならぬとみている點である。すでにみたごとく、リカアドオでは、勞働は價値ではなく、單に價値の規制者にすぎないのである。したがつて、この意味において、彼は勞働が價値尺度であることは認めるわけであるが (*ibid.*, p. 284)、勞働にたいする需給の一樣でないこと、さらに賃銀もしくはそれをもつて購入しうる實質所得の一定でないところから、勞働自身が可變の價値をもつと考へ、不變の價値をもつ貨物をもとめんとして絶えざる努力を試みたものごとくである。しかし、それが所詮もとめえないことを認め、この重要な原因が、金の生産より除かれたとすれば、理論上考察しうる限りにおいて、金は恐らく標準價値尺度に最も近いものをもつこととなるであろうとし、依然として、價値尺度としての金についても疑問を抱きつつも (*ibid.*, pp. 45—46, p. 86)、極めて消極的に、金をもつてつくられた貨幣を *invariable* と認めてゐる。 (*ibid.*, p. 46, pp. 86—87, p. 149) リカアドオによつて、その動態理論の基礎ともい

うべきこの^{*}價值尺度についての所論は、このように極めて不徹底であるが、そのよつてくる所以は、貨物の絶対價值と相對價值との關係、價值と自然價格との關係についての所論が極めて不明瞭であることにもとづくものであると考へられる。このようにみてくると、リカードの價值原理は、幾多の問題點を未解決のまま残しているのであるが、それはともかくとして、彼の體系の基礎ともいふべき價值が、生産の難易に關連するということのうちに、われわれは勞働と自然との關係、しかも、この兩者が不斷に變化しつづける關係が、リカードの思考の根底に横たわつてゐることを、讀みとるべきであつて、このような思考態度は、實は、あとに述べる經濟發展の理論の脊後に、つねに強く働いてゐるのである。

* 同じ主張は、Proposals for an Economic and Secure Currency, 1816にも展開をわづらふ。(Works, Vol. IV p. 60)

** リカードは、一八二〇年六月一三日附の、McCullochの書簡におつて The great questions of Rent, Wages and Profits... are not essentially connected with the doctrine of valueと述べてゐる。スラファによれば、¹「まだ發表をわづらふに他の書簡をも参照するとき、この書簡がリカードの失望落膽の瞬間に認められたものごとくである。(Vol. I p. xxxiii)」

さきにも述べたごとく、リカードにおいては、土地の生産物が、三つの階級、すなわち、土地所有者・耕作に必要な資本の所有者・土地を耕す勞働者に分配せられる自然的過程に、その分析の中心がおかれてゐる。われわれは、ここで以上の價值原理につづいて、地代・賃銀・利潤について一瞥しておこう。

地代理論^{*}

リカードの動態的分配理論が、地代の變動・穀物價格の騰落を樞軸として、展開されてゐることを顧みるとき、地代理論は、極めて重要な意義をもつものといわねばならない。彼によれば、地代とは土壤の original¹にして indestructible¹な力の使用にたいして、地主に支拂われる土地生産物の一部であつて、(Ibid., p. 67) 地代發生の事情と

しては、土地が分量において無限でなく、かつ地質において一様でないこと、また人口増加とともに劣質の土地、或いはヨリ便益の少い位置にある土地が耕作されるにいたる點があげられ、社会の進歩にもなつて、二等地の肥沃度を有する土地が耕作されるに到るとき、地代は直ちに、一等地の地質を有するそれに發生しはじめるとみ、その地代の大きさは、これら二つの土地部分の地質における相違の如何によるとみるのである。^{***} (Ibid., p. 70, この單純な叙述から、われわれの汲取るべきは、(1)差額地代發生の根據が *greatest quantity of labour* による穀物價值決定の法則 (Ibid., p. 34, p. 73, p. 77) と、農業部門における平均利潤率の法則の作用 (Ibid., pp. 70—72) にもとめられていること、(2)地代の大きさを規定するものとしては、地質のみならず位置も考えられるが、重點は土地の肥沃度、地質におけるその生産力におかれていること、^{***} (3)地代は利潤の下落によつて間隙を占め、利潤の下落とともに、ますますその範圍を蠶食してゆくものであること、^{***} (4)最後に耕作圏内にはいつた最劣等地、もしくは最後に土地に投ぜられた資本の收穫は、僅かに耕作労働者の賃銀と資本利潤とにわけられ、地主はこれにあずからないこと、したがつて、穀物の價格は、地主の地代收得のためには騰貴しないということ (Ibid., p. 77, p. 78) が導きだされる。したがつてまた、地代の發生は、リカアドオの價值原理の修正を必要としないことともなるのである。これらの結論のうち、とくに重要な點は、リカアドオによれば、原生産物の相對價值が騰貴するのは、その取得せられる最終部分の生産にヨリ多くの労働量が投ぜられるからであつて、地主に地代が納められるからではないということである。穀物の價值は、かかる地代を支拂わぬ土地において、もしくは地代を支拂わぬ資本部分をもつて生産をおこなう場合の、その生産に投ぜられる労働量によつて左右せられ、穀物は地代が支拂われるから高價なのでなく、穀物が高價だから地代が支拂われるのである。 (Ibid., pp. 74—75) はじめて自らの「分配論」の骨子を示したといわれる論文^{***}において、*Rent is in all cases a portion of the profits previously obtained on the land. It is never a new creation of revenue,*

but always part of a revenue already created. (An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock, Works, Vol. IV p. 18) とするの、まさにこの意味に解することができる。では、このようにして、ヨリ肥沃な土地の當初の收穫の一部分が、地代として取り除かれ、ヨリ劣等の土地が、或いはヨリ不便な土地が耕されるにつれて、土地收穫遞減のために、ヨリ肥沃なる土地の地代が騰貴するような事態をもたらすものは何であろうか。リカアドオによれば、それは人口増加・資本の蓄積である。したがつて、彼は、地代の騰貴がつねにその國の富の増進及びその増加せる人口にたいする食物供給の困難、すなわち、生産の困難の結果であるとみる。それが富の一徴候ではあつても、決してその原因でないのは、富は、しばしば地代が靜止の状態にあるか、甚しきは、下落しつつあるときにおいて極めて速かに増進するからである。なお、リカアドオが地味の肥瘠にもとづく收穫の差等による差額地代のほかに、耕作限界に生ずる絶對地代を認めたか否かの問題がある。リカアドオにおいては、農産物が自由に増加しうる貨物である限り、そこに成立しうるものは差額地代のみであるべき筈であるが、彼が靜止社会における穀物價値の獨占價格化を述べているところから、絶對地代を豫想していたかのごとき感をあたえないではない。彼は、靜止社会において、土地耕作が利潤の消滅するまで擴張せられて、なおそれ以上に人口増加がつづけられた場合に、穀物の獨占價格が成立するとみる。このような場合には、限界地は僅かに労働者自身を養うだけの穀物しか産出しえないのであるから、それ以上に資本を土地に投じて、穀物の生産量を増加せしめることは不可能であり、ここでは、穀物は獨占貨物となつて、限界地における生産費を超過する獨占價格で賣買せられるとみることができよう。たしかに、もはや何らの資本も有利に土地に投じることができぬ場合、したがつて、土地の生産物が増加されない場合には、一國の穀物及び原生産物は、永久的に獨占價格で賣られるとみることができよう。しかし、リカアドオのいう靜止社会では、まだ耕作されない土地があるとみても、決して矛盾ではなく、もし穀物が獨占價格をおびるにいたれば、資本を有利に

投下する途が開かれるのであるから、リカアドオの場合には、絶対地代は想定されるべきではないと思う。*****

* リカアドオの地代についての論述は、次の諸章、すなわち二章地代論、三章鑛山代論、二四章地代に關するアダム・スミスの學說、三二章マルサスの地代に關する意見、からなっている。

** Hutchison は地代理論には、限界生産力分析の暗示があるが、この分析は、主要問題或は Sisler のいう分配の基本理論、すなわち賃銀の上昇が常に利潤を低下せしめるということにたいして、一般化されず偶然的なものになりおわつていっている。
(T. W. Hutchison; Some Questions about Ricardo, *Economica*, Nov. 1952, p. 425)

*** 地代には、土壤の肥沃度の差等から發生するものほかに、既耕の土地に資本がヨリ生産的に使用されることによつて (ibid., p. 71) ならに位置によるものが考えられる。もしこれを考慮すれば、肥沃度の高き土地が必ずしも地代を生むとはいえない筈である。(Karl Marx; Theorien über den Mehrwert, Bd. II Teil 2, SS. 83—85)

**** リカアドオにおいては、地代は、資本の利潤・利子と區別されねばならない (ibid., pp. 67—68) のであるが、事實上、土地の自然力の使用にたいして支拂われる報酬と、土地の改良に投ぜられた資本の使用にたいして支拂われる報酬とは、必ずしも厳密に區別できるものではなく、資本の一部が、ひとたび農地の改良に投ぜられると、土地と不可分に融合し、土地の生産力を増加する傾向をもち、その場合に支拂われる報酬は、厳密に地代の性質をもち、地代の一切の法則にしたがうにしても、土地に投ぜられる資本のうち、然らざるものの報酬は利潤であつて、地代と區別すべきことを説き、(ibid., pp. 261—262) また、生産の困難という事情が、原生産物の相對價値を高め、また原生産物のうち地代として地主に支拂われる割合をも高めるところから、地主は、二重の利益、すなわち、(イ)彼らが收穫する分前が増大し、(ロ)それをもつて、支拂をうける貨物は、ヨリ大なる價値をもつものとなると説くのである。(ibid., p. 83) なお地代の増減を支配する法則が、利潤の増減を支配する法則とは趣を異にし、その同じ方向に作用することは稀であるとみる。(ibid., p. 68)

***** この論文は、一八一三—一五年にわたる穀物關稅法改正をめぐる論争のさなかに發表されたもので、その要旨については、利潤の項で觸れるであろう。このように、地代は新たな収入の創造ではなくて、既につくりだされた収入の一部分にはかならないとすれば、地主の利害は、他の階級の利害と衝突する筈である。リカアドオは、社會の發達につれて、自然に地代が騰貴し、利潤が下落することには反對しない。彼の遺憾とするのは、穀物法のごとき人爲的な手段によつて、地主の利益が偏重されることである。しかし、根本において、リカアドオが穀物の低廉を望ましいとみているのは、それが賃銀を下落せしめるから

である。因みに、スミスは、地代が價格の構成要素であり、地代の高下が價格の高下を左右するとみた。(Wealth of Nations, Vol. I pp. 51—2, p. 57, p. 59)

***** 波多野鼎氏は、リカアドオは絶対地代を否認したとみるべきであるという。その根拠は、(一)靜止的社會では、富及び收入の増加が停止することから、需要者の一方的競争という獨占價格成立の條件の具備しないこと、(二)工業資本の農業部門への移動によつて獨占の破れること、これである。(波多野鼎著「正統學派の價值學說」第一卷、二三七—二四一頁)

賃銀の法則

われわれは、すでに、スミスたちが、賃銀の騰貴が、一樣にすべての貨物の價格を騰貴せしめるとみたのにたいして、リカアドオが、如何なる貨物も單に賃銀騰貴のゆえをもつて、その絶対價格の高められるというものは全くなし (Ibid., p. 46, p. 127) としたこと、したがつて、賃銀の騰貴が、利潤減少の唯一の原因となる (Ibid., p. 27, p. 39, p. 111) ことを知つた。さてリカアドオによれば、労働の自然價格とは、労働者が彼自身及びその家族を増減なしに、永續的に支持しうるために必要な價格であり、したがつて、それは、(イ)習慣上必要な生活資料の分量に依存し、(ロ)かかる生活資料の價格に依存する。これにたいして、労働の市場價格とは、需給にたいする比例の自然的作用によつて、労働にたいして事實上支拂われる價格であつて、或いは自然價格より以上に、或いはそれと一致して定められる現實の賃銀とみる。^{*}(Ibid., pp. 93—94) かくして、賃銀を左右する法則についてのリカアドオの結論は、貨幣價值の變動を度外視すれば、つぎの二つの原因、すなわち(一)労働者の需要と供給、(二)賃銀財價格によつて、賃銀が騰落するというにつきる。(Ibid., p. 96, p. 97) ます、第一の需給についてみるに、労働にたいする需要の大小は、労働支持の向けられる資本部分——賃銀基金——の大小によつて定まり、労働の供給は、労働人口の増減によるとみる。ところが、入口は、有利な事情のもとにおいては、二十五年間に倍加しうるものと計算せられているのにたいして、同じ有利な事情のもとにおいては、一國の全資本は、さらに短い期間内にこれを倍加せしめうるので

あるから、この場合には、賃銀はその期間全體を通じて、騰貴する傾向があると説く。(ibid., p.98) しかし、リカアドオによれば、このような最も有利なる事情は、永續するものではなく、人口増加・資本蓄積は、たとい引續き同一であつても、土地は量において有限であり、賃において差等があるので、それに投ぜられる資本の各増加分とともに、生産率は減退せざるをえない。(ibid., p.98) この間の消息を語るものとして、文化の遙かに進んだ國々の技術と知識とが輸入せられた新しい植民地を例にとり、そこでは、資本は恐らく人間よりも急速に増加する傾向があり、もしも労働者の缺乏が、人口稠密なる外國から補われなければ、この傾向は、賃銀を甚しく騰貴せしめることを説き、さらに、これらの國々が人口稠密となり、耕作が地質の劣れる土地に及ぶにつれて、資本の増加が減少すること、まして人民が久しくそこに定住していて、人口密集し、原生産物の供給率の減退した國々では、むしろ賃銀の低下せざるをえないことを説くのである。したがつて、このような場合に、人口過剰を防ぐには、人口の減少か、ヨリ速かなる資本の蓄積をおいて、それにまさる方法はないわけであるが、すでに肥沃なる土地が悉く耕作されている富める國では、ヨリ速かなる資本の蓄積は、實行むづかしく、望ましくもないとみる。(ibid., pp.98—100) このような叙述からして、われわれは、まずもつて、社会の *Natural advance* によつては、賃銀が需給によつて支配される限り、それは下降する傾向をもつという法則を見出すことができる。(ibid., p.101) ところが、前者の場合、すなわち、社会が進歩し、人口と資本の増加する國々においては、たとい賃銀は騰貴するとしても、果してこの騰貴が永續性をもつものであるか否かは、労働の自然價格が同じく騰貴したか否かの問題に關聯してくる筈である。したがつて、われわれは、第二の賃銀財の價格について考えてみなければならぬ。資本の蓄積が進められ、人口が増加するにつれて、これらの必需品は、その生産にヨリ多くの労働を要するのであるから、すでにみたごとく、その價格は不斷に騰貴する。したがつてこの場合、労働の貨幣賃銀も當然騰貴するといふことができる。ただ、リカアドオは、この場合

の賃銀の騰貴は、以前と同じ數量の賃銀財を購入せしめるほど騰貴しないとみてゐる。^{**} (ibid., pp. 101—102) このようにして、リカアドオは、二つの視野から、地代を騰貴せしめると同じ原因、すなわち食物の増加量と同じ比例的労働量をもつて供給することの困難の増大が、また賃銀を騰貴せしめるとし、^{**} (ibid., p. 102) 貨幣の價值を不變とすれば、地代と賃銀は、人口の増加と資本の蓄積とともに騰貴する傾向をもつという歸結を導きだしてゐる。^{***} (ibid., p. 102) このような賃銀の法則を顧みるとき、リカアドオが土地收穫遞減の法則の脅威にとりつかれ、賃銀が人力をもつていかにともなし難い自然率の支配をうけるとみてゐることが窺われる。^{***} したがつて、彼は、他の一切の契約と同じく、賃銀もよろしく公平にして自由なる市場競争に委ねるべきであつて、立法府の干渉によつて統制されるべきではないとし (ibid., p. 105) 'Poor laws' にその批難・攻撃をあびせ (ibid., pp. 105—109) 労働者の境遇を改善する方法は、むしろ労働者自ら無分別な結婚を抑制し、労働者の數を制限する以外にないとする。

* リカアドオによれば、賃銀の騰貴は、一つに生産資料を給することの困難さにあり、(ibid., p. 41, note p. 42) その低下は、穀物及び必需品の生産に要する労働量の減退による價值低下、その結果としての労働者の生活維持の容易さによる。さらに、労働の自然價格は、それが食物及び必需品をもつて見積られても、これを絶對的に固定不變なるものとみてはならぬこと、それは同一時においても、時代を異にするにつれて異り、國を異にするにつれて大いに異なること、したがつて、社會の進歩とともに、製造品は常に下落し、原生産物につねに騰貴するということからして、富める國においては、労働者は僅かにその食物の極めて少量をすてることによつて、豊かに他の欲望をみたしうるといふ結果が起るとみる。(ibid., pp. 96—97)

** リカアドオは、地代の騰貴と賃銀の騰貴とは、本質的に異るとし、地代の場合には、ただに地主の貨幣地代がヨリ大となるのみならず、その穀物地代も同じく増加するのに反して、賃銀の場合には、労働者はヨリ多くの貨幣賃銀を收めるに違ひないが、穀物賃銀は減少するとみる。

*** リカアドオは、他のところで、次のごとく述べてゐる。すなわち、「賃銀の騰落は、社會のすべての状態に共通であつて、それが靜止、進歩、後退の何れの状態にあるかを問わない。靜止状態においては、それは全く人口の増減によつて左右される。

進歩状態においては、資本と人口の何れが早く増大するかに依存する。後退状態においては、人口と資本の何れがより早く減少するかに依存する」と。(Works, Vol. IV pp.22—23)

*** リカアドオの立場において、労働者の賃銀が、利潤にたいしてよりも冷酷であると感ぜられる。その理由が、猶太人としての性格、その株式取引人としての閱歴にあるかどうかは即断を許し難い。むしろ、「原理」の「總收入と純收入」の章において、租税として、また貯蓄のため多少とも控除をなしうるものとして利潤と地代をとりあげ、賃銀を生産の出費を構成するのみ点が考慮されるべきであらう。

利潤率の法則*

われわれが、リカアドオの價值原理から知りえたことは、穀物價格が、地代を納めない資本部分を用いて穀物を生産するに必要な労働量によつて左右されること、すべての製造品の價格は、その生産に必要な労働の多少に比例して騰落すること、貨物の價側は二つの部分、すなわち、利潤と賃銀からなるということであつた。このような基本原理に立ちつつ、われわれは、ここで資本蓄積と密接なる關連をもつ利潤率の永續的な變動法則——すなわち *natural tendency of profits is to fall* (ibid., p.120) の意味を明かにせねばならない。ところがリカアドオは、この法則

の理論的展開をば、限界生産物の價格より賃銀を控除した殘額を利潤とみ、資本蓄積にともなう穀物價格の騰貴を中心に、賃銀・利潤の關係が如何に變動するかというふうに進めている。したがつて、まず、利潤の大きさの決定論から考察をはじめてみよう。リカアドオによれば、利潤一般は、まずもつて農業利潤がその基礎をなし、それは地主と労働者への支拂をすませた後の土地生産物の殘量 (ibid., p.112) であるという意味において、限界地の收穫、すなわち、限界生産物の價格から賃銀を控除したものとみる。この意味からすれば、もし土地の收穫が、耕作労働者自身を養うにすぎなければ、全く利潤發生の余地がなく、もし、土地の肥瘠によつて、その余剰生産力に差等があれば、利潤を決定するものは、現在耕作せられる最劣等地の余剰產出力である。この限界地の余剰產出力の農業資本にたいす

る比例が農業利潤率を決定し、農業利潤率が資本の自由流動によつて、一般商工業利潤率を決定するとみるのである。かくして、限界土地の農業利潤率に、リカアドオの所説の焦點がおかれていといわねばならぬのであるが、その説くところは、資本の蓄積が極めて大なるときは、その価値の増加にもかかわらず、その価値が、地代・賃銀に割りあてられる部分が増加し、利潤にはこれまでよりも少い部分が割りあてられるようになるというにある。(ibid., p. 124)このことは、すでに彼が社会發達の初期においては、地主と労働者との土地生産物の価値にたいする分前がともに僅少にとどまり、人口・資本の増加にともなつて食物獲得の困難が増加し、それに比例して、彼らの分前が増加するとみた點から推して、社会發達の初期においては、利潤が大であり、社会の進歩とともにそれが減少するということもできるはずである。しかし、われわれは、この點をヨリ明確にするために、利潤の源泉をなすところの穀物價格、ひいて諸貨物の價格が、その生産に必要な労働量の増したために騰貴した場合、農業家と製造家の利潤に如何に影響するか (ibid., pp. 111—112)ということ、それとならんで、その控除項目たる賃銀が、穀物價格の動きにつれて如何なる傾向をもつか、という點を詳細に吟味しなければならない。しかしながら、そのまゝに重ねて指摘しておかねばならぬ點は、價值原理の corollary としての賃銀と利潤との相反性——賃銀の騰貴が必然的に利潤を削減すること (ibid., p. 35, p. 111, p. 118) 換言すれば、利潤が nominal wage でなく、real wage に依存すること、(ibid., p. 143) しかし、このことは貨物の價格には何らの影響もなし (ibid., p. 133) とするリカアドオの立場である。このことは、すでに述べたごとく、自明の理ではあるが、この叙述のうちに、利潤が必需品を生産するための費用と、すべての生産物を生産するための費用によつて、獨立的に決定されるという意味をも含んでいる。したがつて、いま、穀物と製造品の價格があたえられているとすれば、彼の論理を追つていくとき、利潤は賃銀の高低によつて左右され、賃銀は必需品の價格によつて左右され、必需品の價格は、食物の價格によつて左右される (ibid., p. 119) わけであるか

ら、利潤は賃銀の高さによつてのみ、左右されるといえるであろう。(ibid. p. 110) しかし、リカアドオの動態的分配理論の立場は、分配の問題をば、價格變動過程のうちには把えていることを注目すべきである。さて穀物價格の變動については、すでに、地代理論でみたごとく、リカアドオは、そこに收穫遞減の法則の作用を認め、地質の劣れる土地に耕作をおこなう困難の増大するにつれてのみ、それが騰貴するというのである。(ibid. p. 113) したがつて、この穀物價格の騰貴は、リカアドオによれば、これをつくるべき原料にヨリ多くの労働量が費されたためであつて、これに費された労働が高價となつたためでない (ibid. pp. 117-118) という點が強調されるとともに、かかる生産物の價格騰貴という一面にのみとらわれ、農業家・製造家は、たといその全産物の割合が減少しても、地主・労働者と同じく、大なる價值を收めるとみる誤謬に陥ることをたしなめ、(ibid. p. 112) たとい貨物の價格は、高賃銀のために永続的に高められたとしても、高賃銀は、real profit の一部を奪うことによつて、必ず農業家の利潤が減退するという命題が眞理として力説される。(ibid. pp. 126-127) かくして、われわれは、生産物の價格騰貴が、農業家・製造家にもたらす影響についての考察に進まざるをえない。この點についてのリカアドオの要旨は、社会の進歩、すなわち、人口の増加と資本蓄積の増大するにつれ、生産物の一定附加量をうるために、ヨリ多くの労働と資本とを用いる必要があります増加し、穀物價格が騰貴する場合には、全生産物のヨリ大なる割合の價值が、賃銀に吸収され、ヨリ小なる割合の價值が利潤にあてられるという點にあり、彼によれば、このことは、土地の生産力を制限した自然の法則、すなわち收穫遞減の法則によつて、必然永久的なものにされるのである。(ibid. pp. 125-126) 換言すれば、穀物價格の騰貴は、つねに附加地代、または雇傭せられる附加労働の價值によつて差引かれ (ibid. p. 113, p. 114) 穀物價格の騰貴による賃銀騰貴の償いが、農業家にも製造家にもあたえられず (ibid. p. 112) 賃銀が穀物の騰貴とともに騰貴すれば、その場合、農業家・製造家の利潤が必然的に下落することは、絶対に確實であるという。 (ibid. pp. 110

—(三)—この點について、リカアドオは、自ら「もし農業家は地代を支拂つたあとに、手に残る穀物にたいして、少しの附加價值をも收めず、またもし製造家は、その製造品にたいして少しの附加價值をも認めず、しかして、もしも兩者ともに賃銀としてヨリ大なる價值を支拂わねばならぬとすれば、利潤は、賃銀の騰貴とともに、下落せざるをえないことほど明確なものがありうるだろうか。」(ibid., p. 115)と述べている。ここで、リカアドオは、労働者の貨幣賃銀を増加せしめる穀物價格の騰貴が、農業家の利潤を減少せしめること (ibid., pp. 113—114)、結局において、農業・工業の利潤・利潤率はともに、賃銀の騰貴がこれにともなう限り、原生産物の價格騰貴のために低下すると説くのである。^{*****}(ibid., p. 113, p. 115) 以上は、劣等土地につきつきに耕される場合であるが、リカアドオによれば、古い優良の土地を耕す農業家の場合も、これと異なるところがない。(ibid., p. 114)かくして、われわれは、リカアドオ體系における利潤率の低下の法則の核心を知りえたのであるが、それと資本蓄積との關係については、「原理」における叙述 (ibid., p. 289) のほかに、一八一四年二月一八日附のマルサス宛の書簡のうち「これを見だすことができた。すなわち、Accumulation of capital has a tendency to lower profits. Why? because every accumulation is attended with increased difficulty in obtaining food, unless it is accompanied with improvements in agriculture; in which case it has no tendency to diminish profits. If there were no increased difficulty, profits would never fall, because there are no other limits to the profitable production of manufactures but the rise of wages. If with every accumulation of capital we could tack a piece of fresh fertile land to our Island, profits would never fall. (Works, Vol. VII) ニンニ、リカアドオ體系において、資本蓄積の占める位置が明らかにされているばかりでなく、それと利潤率との關係を窺うことが出来るであろう。なほ、ここで、このような利潤率低下の理論に關連して、われわれの注目すべき諸點を指摘す

れば、(イ)限界土地の生産物、すなわち限界生産物の価格を構成する利潤が、同一生産部門内では、一般的利潤率を決定するという点であつて、(ibid., pp. 119—120) 資本が一用途から他の用途に動かされるのは、利潤の inequality を通じてであり、(ibid., p. 119) この利潤の均等化は、利潤の一般的上昇によつてもたらされるものではなく、とくに恵まれた産業の利潤が、速かに general level へ沈下することによつてなされ、同じ一国内にあつては、利潤は大體において同一水準にあるか、或いは僅かに資本使用法の安定・不安定と快・不快とに應じてのみ差等があること (ibid., p. 134)、(ロ)リカードオは、この法則理論とならんで、賃銀の引下が可能なときには、利潤率の低下が阻止されることを認め (ibid., p. 118)、のちに述べることく、必需品の生産にかかわる機械の改良・農業科学上の発見によつて、これまでの所要労働の一部分が不要となり、したがつて、労働者の必需品の価格が低下する場合は、この法則の作用が阻止されうることを指摘しているが、(ibid., p. 120) およそ利潤率にたいして影響を及ぼす要因は、それが全生産物の価値にたいする賃銀の比率を變化させる限りにおいてのみ、その影響を及ぼすものであること (ibid., p. 126)、したがつて賃銀を騰貴させるような何らかの恒久的な原因がなければ、資本の蓄積が永続的に利潤を低下させないこと、これである。*****
リカードオの基礎理論としては、なお論及さるべき點がないではないが、これまでみてきた地代・賃銀・利潤の natural course を繞つて、リカードオは、社会の進歩をどのようにみていたであろうか。これが次節の問題であり、本稿の中心點でもある。

* 利潤については、五章利潤論、一九章蓄積の利潤・利子に及ぼす影響において主として論ぜられている。

** リカードオは、利潤が限界投資によつて決定されるという点について、すべての國、すべての時代において、利潤はその地代を生まない土地において、もしくは、地代を生まない資本をもつて、労働者に必需品を供給するに要せられる労働の量に依存するという同一の結論に達すると述べている。(ibid., p. 126)

*** この点について、リカアドオの具体的説明は、次のごとくである。(ibid., pp. 113—117)

*** この場合、農業家・製造家は、絶対的利潤の低下のほかに、その資本価値の上昇からくる一層の利潤率低下をこうむることが指摘されている。(ibid., p. 117) それほどなく賃銀の上昇が利潤率低下の唯一の原因とみる点は、価値原理と関連することを見逃してはならぬ。このことから、賃銀財に割當てられる必要のある社会的労働量を、非賃銀財産業に割當てられた量に比例して、増加せしめないものは、如何なるものでも利潤率を引下げえないこととなる。明かに、資本の蓄積は、もし食物獲得の困難の増加と結びつかなければ、この比率には影響しない筈である。

*** この点についての、リカアドオの具体的説明は、次のごとくである。(ibid., pp. 113—117)

前 提	限 界 土 地 の 生 産 量 の 数 量	穀物価格 1qr 當り	生産物価値 £ 720	分 配		利 潤 率
				貨幣賃銀 10人當り	農業利潤	
180	qrs	£ 4	£ 720	£ 240	£ 480	資本 £3,000 16%
170		£. s. d. 4 4 8	£ 720	£. s. 247	£. s. 473	15.8%
160		4 4 10	£ 720	255	465	15.5%
150		4 4 16	£ 720	264	456	15.2%
140		5 2 10	£ 720	274	445 15	14.8%

穀物一八〇クオターは、つぎの割合で地主・農業家・労働者の間に分割される。(ibid., p. 116, note)

1クオターの穀物價格	小麥地代	小麥利潤	小麥買銀
£. s. d. 4 0 0	0 qrs	120 qrs	60 qrs
£. s. d. 4 4 8	10	111.7	58.3
£. s. d. 4 10 0	20	103.4	56.6
£. s. d. 4 16 0	30	95	55
£. s. d. 5 2 10	40	86.7	53.3

同一状態のもとて貨幣地代・買銀・利潤は次のごとくなる。(ibid., p.116, note)

1クオターの價格	地代	利潤	買銀	計
£. s. d. 4 0 0	0	480	£. s. d. 240	£. s. d. 720
£. s. d. 4 4 8	42 7 6	473	247	762 7 6
£. s. d. 4 10 0	90 0 0	465	255	810
£. s. d. 4 16 0	144 0 0	456	264	864
£. s. d. 5 2 10	205 13 4	445 15	274 5	925 13 4

賃銀騰貴を利潤低下の唯一の原因とみる見解について、Meekは「つぎのことくみる。すなわち、「市場における價值關係が窮極的に生産過程における人と人との社會關係を反映するという信念と結びつき、かつ、生産過程は他の生産要素を假定することなしに、人間労働をもつて適當に記述できるといふ確信と密接に結びついていた。」と。(R. L. Meek; 'The Decline of Ricardian Economics in England, *Economica*, Feb. 1950, p.49) この解釋は「分配論」と労働價值原理との關連についての一つの見方

であるが、なお、リカアドオの所説のうちに、相対的な余剰價值増大の場合、すなわち、労働の生産性の増大が、必需品の生産にまで及んで、全貨物とか労働力の價值が下落する場合がとりあげられていないことも注目に値するといいたい。

**** リカアドオの論文 *An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock, 1815* (Works, Vol. IV pp. 9—41) は、さきにも指摘したごとく、穀物の輸入制限が利潤に及ぼす影響を論じたものであつて、マルサスとの穀物價格論争を中心としている。マルサスは、輸入制限の結果、資本の大なる減少があるならば、輸入制限が利潤率をヨリ低下せしめることとはないとみたのになつて、リカアドオは、輸入の制限が利潤率に及ぼす影響は、獨立的に資本の減少をもたらすに違ひないと答へたのである。その理論的根據は、兩者の間に關連がなく、或る時は同一歩調をもつて、ある時は逆に働くとみたらあつて、マルサスと比較するときは、資本が不足するとき利潤が高いという点では、兩者は一致し、資本蓄積と利潤率との逆の關係については、兩者は一致をみるところがなかつた。ここにわれわれは、ヨリ根本的な観点が潜んでいることを知りうるのであつて、マルサスは、輸入制限が資本減少を惹起し、その結果、制限からくる賃銀上昇の影響が相殺されるというのであつて、ここでは、需要の供給にたいする比率が増加しつづけるとみる立場から、利潤は低下しないとされる。これにたいして、リカアドオは、短期では、資本と生産物は、需要よりも早く減少するが、長期では、有效需要は資本の減少とともに増加したり静止しつづけることはできぬ、すなわち、供給は需要を越えないとみるのである。この点は、のちにみるごとく、リカアドオの体系とセイの法則との關連の問題につながる。

III

リカアドオの所論をば、經濟の發展という視野から整理してみると、二つの過程にわけることができる。一つは、經濟の無限擴張の過程であり、いま一つは静止状態に向う過程である。しかし、このような過程をば、*advancing state, retrograde state, stationary state* に、すなわち、社會發達の段階と、衰退の段階と、静止の段階の三つに分解すれば、問題の所在がヨリ鮮明となるのではないかと考えられるため、たといこのような段階別にもなう幾多の困難を豫想しつつも、あえて三つの段階別を試み、考察を進めることとしたい。^{*}

* 以下の叙述においては、貨幣價値の變動が度外視されている。

(4) 社会發達の初期における無限擴張經濟のモデル

リカアドオがその價値原理を展開するにあつて、原始未開の社会を假定したことは、すでにみたところであるが、それは現實の原始社会と多くの距りをもち、多分に思辨的なものごとくではあるが、* 少くともリカアドオにとつては、それが彼の労働價値についての基本原理の妥當なる領域であり、以下の二つの段階における基本圖形を、ここで示している意味で、重視されねばならない。さて、いまだ技術的にも經濟的にも發達のみられない社会の初期の段階は、原則として、肥沃なる土地が豊富にある社会とみてよい。リカアドオは、このような社会において、人口の増加と資本の蓄積とが、相まつて急速に進展するとみるのであるが、この兩者の關係について、例えば、人口増加をもつて、他の如何なる社会的條件にも依存しない第一次的なものとみるべきか、或いは、その人口増加こそ、資本蓄積にもとづくものとみるべきかが問われなくてはならない。リカアドオによれば、それは經驗の示すごとく *Capital and Population alternatively take the lead* *^{**}であつて、一方では、人口増加をば、普遍妥當なそれ自ら貫徹する自然法則として認めているとともに、他方では、人口増加が一つの社会條件、すなわち資本の蓄積（流動資本の増加）^{**}によつて制約されるとみるのであるが、リカアドオの所論の理論的な基本線を顧みるとき、彼は、このように兩者の相互依存關係を認めてはいるが、その理論の出發點を、農業利潤を中心とする資本蓄積すなわち貯蓄（*ibid.*, p. 131）にもとめ、この貯蓄を基盤として理論を展開しているとみたい。彼自らいごとく、資本の蓄積される方法は、一つは、収入の増加であり、いま一つは、消費の減少であるが（*ibid.*, p. 131）、これらの原始蓄積は、農業利潤によつて徐々に形成され、増加されていくとみられるのであつて、この場合、資本の蓄積の動因となるものは、あくまで利潤であり、資本がどれほどであるにしても、ともかく利潤が生ずる限り、蓄積がおこなわれるとみる。（*ibid.*, pp. 123—124）

ところが、リカードオの分析の重點は、資本蓄積、すなわち流動資本の蓄積の遲速にあり、それが労働の生産力に依存し、それはまた土地の生産力に依存するとみるところにある。*****いま、ここでとりあげている段階においては、すでにみたごとく、肥沃なる土地が豊富にあり、したがつて、労働の生産力が最も大であるのが常であり、したがつて、資本の蓄積は、しばしば労働者が資本と同じ速度をもつては供給されぬほどの速さをもつて、おこなわれている。されば、この段階においては、生産物の價値の一部としての賃銀は、労働の需要に比較して供給の稀少である結果として、その自然率以上になると考えられる。(ibid., pp. 125—126) もともと、賃銀はその自然率に一致せんとする傾向をもつのであるが、進歩しつつある國においては、この市場率は、ある不定の期間にわたつて、つねにそれ以上にあることがありうる。というのは、資本の増加が、新たな労働需要に衝動をあたえるや否や、たちまち、さらに新たな資本の増加が、同じ結果を生じうるとみるからである。これにたいして、労働者を支持したあとに残る生産物としての利潤については、もともと資本蓄積にともない、利潤率の低下法則の作用をうくべきであるにもかかわらず、ここでは、資本の蓄積につれて、新たな肥沃土を附加しうるのであるから、利潤は低下することがない。(ibid., p. 126) このようにして、この段階における速かなる資本の蓄積は、人民のすべての階級にとつて好ましいものであるといえよう。(ibid., p. 99) 最後に、地代についてであるが、この段階では、豊富なる分量の土地があつて、しかも、いまだ占有されておらず、したがつて、それを耕さんと欲する人は、何人でもそれを自由に使用しうるのであるから、空氣・水と同じく、需給の原理にもとづき、かかる土地には、地代が支拂われることはない。(ibid., p. 69, p. 75, p. 72, p. 126) このようにして、資本の増加が不斷におこなわれる結果として、労働にたいする需要が、人口の増加にたいして連続的な刺戟をあたえる。(ibid., pp. 94—95) すなわち、資本の増加・その結果たる労働にたいする需要の増加・賃銀の騰貴によつて、まず労働者の他の享樂が増加するとともに、労働者の状態が改善され、結婚を通じ

て人口は増加していくとみる。(ibid., p. 98, p. 406) この人口の増加は、ひいて生産物にたいする需要を増大せしめ、それは資本にたいする投資誘因を通じて、ひいては、資本蓄積に導いていく。人口と資本の相互依存を説くリカードは、すでにみたごとく、人口増加によつて、逆に資本蓄積の制約されることを主張するのであるが、この場合には、人口が増加しても、穀物価格が騰貴し、賃銀が騰貴し、利潤が低下し、ひいて資本蓄積が減少し、地代が発生する事態は起りえない。なぜなら、この段階では、肥沃なる土地が、増殖する人口にたいする食物生産のため必要な程度以上に十分に存在し、資本が舊い土地にたいして減収をみることなしに、無際限に投下せられうるのであるから、たとい人口から資本への交互作用が繰返されていくにしても、それは縮少過程をもたらずものでなく、むしろかえつて、資本蓄積を増加せしめる傾向にあるとみてよい。かくして、このような恵まれた自然のもとにおいては、資本の増加と人口の増加が、漸次的にたえまなく繰返され、そこに成長的な比率が維持される限り、経済社会は無限擴張の過程をつづけるとみるのである。

* リカードの著作のうち、しばしばあらわれてくる「原始社会においては」という叙述が、自然経済をあらわしているものではなく、むしろ複雑な機構をもつ現在社会の説明原理であつて、決して發生原理でないことは、ここで強調しておかねばならぬ。(杉村廣藏著「經濟哲學の基本問題」一六七頁)

** An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock (Works, Vol. IV p. 23) リカードは、あるところでは、人口増殖力はつねに同一であるとし(ibid., p. 98)、また労働者の供給が同一率で増加しつづけるとし(ibid., p. 101)、とくに地代論で地代の發生とその騰貴の起動力を、人口増加にもとめているが、これらの主張と全く相反して、マルサスの人口原理を嘆賞しつつも(ibid., p. 398)、人口の一般的増加が資本増加、その結果たる労働にたいする需要及び賃銀の騰貴によつて影響されるとは考えないで、食物の豫め備えられることによつてのみ増加するという考え方に、マルサスが傾きすぎていることを難じ(ibid., p. 406)、人口は、これを履備するための基金によつて、自らを調整すること、(ibid., p. 78) 高き賃銀が人口増加を奨励することを述べている。(ibid., p. 94)

*** リカアドオは、資本をもつて、一國の富のうち生産に使用される部分とし、(ibid., p.95) 資本はその價值が騰貴すると同時に、その量も増加しうる場合と、それが増加しても、價值が増加しない、否、減少する場合をあげ、(ibid., p.95) 資本の大小は、(一)は、富の増減に依存し、(二)は、生産的に使用される富の分量に依存するとし、これらの區別を明確にしないで、富の増加、すなわち資本蓄積が如何なる條件に依存するかを論じている。しかし、リカアドオにとつては、資本の蓄積の問題は、その遅速にあつたことはいふまでもない。なお注目すべきは、次の一節である。すなわち「一國の生産物のすべてが消費されることは、諒解されねばならぬ。しかし、それが再生産する人々によつて消費されるか、それともそれを再生産しない人々によつて消費されるかは、想像しうる限りの最大の相違がある。われわれは、収入が貯蓄されて資本に加えられるとき、その意味するものは、資本に加えられるといわれる収入部分が、生産的労働者によつて消費されるということである。資本が不消費によつて増加すると想像するより甚しき誤謬はない。」と。(ibid., p.151, note, p.122) ところで、リカアドオは、明らかに、収入の單なる保藏が資本の蓄積でなく、収入の生産的消費を説いている。ただ、その資本の蓄積が總資本の擴張再生産としてではなく、流動資本の追加として、資本の蓄積と労働とを雇傭する手段の蓄積とを同一視している(ibid., p.98) 点は、つぎに展開する(四)の段階におけるリカアドオの分析の不徹底さと密接な關連があるといつてよい。

*** この場合、リカアドオが技術的・社會的條件に依存する労働生産力の増大を意味しないで、それをもつて土地の生産力という自然的條件に左右せられるものとして注意されるべきである。

(四) 轉換期から衰退期にいたる經濟のモデル

リカアドオにおいて、經濟社會を驅つて、資本蓄積を無限に進展せしめるものは、農業資本の盲目的な利潤本能であり、その實現を可能ならしめるものは、土地生産力の無限性であるといえる。とすれば、この前提條件、すなわち、土地の生産力の無限性の喪失、有限性への推移こそ、實は、經濟社會を擴張から衰退へ轉換せしめるものといわねばならぬ。すでにみたリカアドオの動態分配理論の中核としての利潤率の低下法則、收穫遞減の法則の働きのが、この轉換期以後の局面においてであるのもこのためである。すでに(イ)でみたごとく、人口と資本は、相互に作用しつつ無限に増大していくのであるが、では、この過程のうちに、ひとたび不可避的な自然の拘束が導入され、この人口

増加にたいして、耕作を擴張せんがため、産出力の劣る土地に耕作が及ぶとすれば、如何なる事態が発生するであろうか。リカアドオによれば、資本の蓄積につれて、限界地の收穫は減少し、労働者の生活費をそれから控除した余剰、すなわち利潤は減少し、一般利潤率は下降し、利潤の減少しただけ地代が増加し、固定資本を多く使用する生産物の價値は下落するとみる。さらに、人口が増加すれば、耕作限界は擴張せられ、利潤率はさらに低下し、地代はさらに騰貴し、農産物の製造品にたいする價値は、さらに騰貴するとみているようである。いま、このような過程についての素描を、より詳細に吟味すれば、まづ第一は、原生産物の自然價格の推移である。資本蓄積にもなつて、人口が増加すれば、人間の主要な生活資料としての穀物の數量が増加されねばならぬ。このことは、人々を驅つてヨリ肥沃ならざる土地、ヨリ不便な位置にある土地を新たに耕作せしめるか、或いは、これまで耕作してきた土地に、遞減する収益をもたらす追加資本を投ずることを余儀なくせしめ、その結果として、穀物價値は騰貴する。その理論的理由は、すでにみたごとく、(イ)同一量の資本・労働をもつてして、ヨリ少量の穀物しか獲得されえないこと、(ロ)穀物の價値が最大労働量によつて決定されること、これである。つぎに、賃銀についてであるが、その自然價格を左右する主要要因としての穀物の生産の困難が、すでに増加したことは、當然に賃銀を騰貴せしめる傾向をもたざるをえなす。(Ibid., p. 96, p. 115)ただここで、賃銀について注目すべき點は、穀物が高くなるに比例して、労働者の貨幣賃銀は増加するであろうが、彼はヨリ少ない穀物賃銀を受取るということ*、このことは、生活水準の低下を意味するということ、またのちに述べるごとく、この場合、農業上の改良、或いは食料輸入のできる新市場の発見があれば、一時必需品の價格を騰貴せしめんとする傾向に逆い、場合によつては、その自然價格の下落をきたすこともあるから、労働の自然價格も下落するということ (Ibid., p. 93)、最後にこの賃銀の騰貴によつて、機械使用にたいする新しき誘因があたえられ、舊國においては、絶えず機械の採用を促され、新國では、労働を使用することとなり、人口増加が

賃銀をいささかも騰貴せしめることなくして起りうるということがありうるということ、これである。(ibid., p. 41 note) 第三は、地代の発生と騰貴である。われわれは、さきに人口の増加につれて、食物の供給は劣等の土地に依存せざるをえなくなり、それとともに、すべてのヨリ肥沃なる土地に、地代が発生し(ibid., p. 70)、さらに、生産収益のヨリ少ない土地に附加資本を投下することが必要となるにつれて、その附加部分ごとに、地代の騰貴することをみた。(ibid., p. 78) 地代について注目すべき點はつぎのごとくである。まず、地代は利用しうべき土地の生産力が減退する場合に、最も急速に増加するということ、富の増加は、利用しうべき土地が最も肥沃であつて、輸入の制限最も少なく、また農業上の改良によつて、労働量に何らの増加なくして生産物を増加せしめうべき國々、したがつて、地代の騰貴の最も緩かな國において、最も急速におこなわれるということ、(ibid., p. 77) また、すべての進歩せる國々では、年々地主に支拂われるものは、地代と利潤の兩性質を帯び、あるときは相反する原因の作用のため動かす、あるときは、原因のうちの何れが優勢を占めるかによつて、増進し或いは減退すること、(ibid., p. 68) また、地代は常に消費者の負担に歸し、決して農業家の負担とならること(ibid., p. 114)、さらに、リカードオの場合は、蓄積の促進という過程が、生産物のうち、地代のために吸収せられる部分が、不斷に増進するという形で發展し、穀物價格の騰貴にもとづく地代の騰貴にもなつて、労働の自然價格は騰貴するが、労働者收得分の價值は、食物の高價值のために増加するとはいへ、その實質的分前は減少する一方、地主のそれは、ただにその價值においてのみならず、量においても増加すべきこと、(ibid., p. 112) 最後に、地代という分配の一形態の發生過程は、地主階級の發生過程でもあり、ここに三階級が構成され、賃銀・利潤・地代の三位一體的分配形態が備わるということ、これである。最後に、原生産物と労働を除くすべての貨物の自然價格の動きである。これらのものは、一方においては、それをつくるべき原料の自然價格の騰貴によつて、その眞實價值は高められ、たとい機械の進歩により、分業・労働配分の改善により、また

生産者の科学と技術上における熟練の増進によつて、それが償われるにしても、なおそれによつては相殺されず、富と人口との發達につれて下降せざるをえないとみている。(ibid., pp.93—94)ここであらためていうまでもなく、これらのすべての作用から導きだされる歸結は、利潤率の低下である。それが投資誘因を喪失せしめ、資本蓄積を徐々に減退に導かざるをえないことは、もはや多言を要しないであろう。

* 穀物價格の上昇につれ、貨幣賃銀は騰貴、穀物賃銀は下降することについての例証は、次のごとくである。賃銀の半分が小麦に、他の半分がその他の貨物に消費され、後者の價格は不変と假定する。(ibid., pp.102—103)

小麦價格1qr當り (a)	貨幣賃金 (年額)				穀物賃銀 ($\frac{p}{a}$)
	小麦に消費		他の貨物に消費		
£. s. d.	£. s. d.	£. s. d.	合計 (b)	qrs	
4	12	12	24	6	
4	4	12	14	5.83	
4	10	13	10	5.66	
4	16	14	8	5.50	
5	2	10	12	5.33	

さて、リカードオのいう社会未發達の段階が、たとい説明原理としての意味しかもたないにしても、そして、もし肥沃なる土地の耕作が無限に可能である限り、そこには、一應無限な擴大再生産が豫想されるにしても、われわれは、ただに農業生産を樞軸とする發展にとどまらず、この擴大再生産過程において、徐々に形成されていく産業資本の動向が問われなくてはならぬ筈である。しかも、それと併んで、社会の進少、すなわち人口と資本の増加にともなつて、無限擴張のモデルが如何に變貌するかという、この轉換期における分析においても、われわれは、農業資本と

ならんで、産業資本のもつ役割が當然考慮されねばならぬであろう。ことに、リカアドオの基本的な価値原理が修正を余儀なくされた、進歩しつつある社会を考慮する段階においても、またその轉換期の局面においても、農業資本のみでなく、それと産業資本との構成についての分析が考慮されねばならぬと考えられる。^{*}それにもかかわらず、このところで、われわれがリカアドオから汲取りうるものは、極めて断片的な叙述、すなわち、固定資本を用いること、少い農産物と製造品との相對價值が、投入労働量の増加と利潤低下との二重の原因のために騰貴すること、流動資本にたいする固定資本の増加は、純所得を増加せしめるが、總所得を増加せしめぬということ、農業利潤が他の利潤率を左右するというなどが、散見されうる程度にとどまり、その資本構成についての分析はまるでなされていない。ここに、リカアドオの資本蓄積論のもつている基本的な性格が最も明らかにされているとみてよいであろう。

* 資本構成の分析が當然豫想されるにもかかわらず、リカアドオにおいてそれが、極めて不充分であるのは、一つに經濟の發展が自然對人口との關係でとらえられていることにあるといつてよい。それは、次の諸点にあらわれている。

- (イ) 價值と自然價格との同視(本稿Ⅱ節)
- (ロ) 固定資本と流動資本との區別を單に時間の問題におきかえていること(Ⅱ節)
- (ハ) 資本の耐久性の相違を生産期間の長短と同一視していること(Ⅱ節)
- (ニ) 同一部門における個別利潤率と異部門間における一般的利潤との混同(Ⅱ節)
- (ホ) 流動資本が勞賃のみを對象とすること(Ⅱ節)
- (ヘ) 固定資本の分析の不徹底なこと(Ⅱ節)
- (ト) 製造品工業について觸れるところ少く、考察の中心が agriculture firm にあること(Ⅱ節)
- (チ) 利潤の源泉を土地にもとめ、農業利潤を中心とし、産業利潤を從屬的とみていること(Ⅱ節)
- (リ) 利潤率低下の法則が、賃銀上昇にもとめられていること(Ⅱ節)
- (ヌ) 相對的余剩價值の増大を無視していること(Ⅱ節)

(四) 資本の蓄積を流動資本に限定していること (III節イ)

(ハ) 静止状態の様相

リカアドオによれば、資本蓄積の努力は、社会進化の起動力ではあるが、人口原理と土地收穫遞減法則が、經濟社会を導いていく過程は、とりもなおさず、自然と人間との衝突であり、その最終の極點は、資本蓄積をはじめ彼の理論におけるすべての可變的な動因が静止する状態である。ここでは、資本蓄積・穀物價值・賃銀・人口數がすべて固定的な大きさを持つにいたるのである。(Ibid., p. 101) われわれは、經濟社会のこのような行き詰りについてのリカアドオの所論を吟味しなければならぬ。すでにみたごとく、リカアドオにおいては、資本の蓄積、人口の増減を規定するものは、利潤率の變動であるが、人口増加のために、新たに肥沃度の劣れる土地に耕作が及べば、余剩收穫は減少し、一般利潤率も低下する。さらに、耕作労働者の生活費以上に、何らの余剩をもうまぬ土地を耕さねばならぬ段階にいたるとすれば、農業・工業上における利潤は皆無となる筈である。ところが、このような利潤率の自然的低下の傾向^{*}にもなつて發生する様相について、リカアドオ自ら説くところは、つぎのごとくである。すなわち、社会と富との進歩につれて、必要とされる食物の附加量は、ますます多くの労働の犠牲によつて獲得されねばならぬが、必需品の價格騰貴と賃銀の騰貴には、自から限界がある。なぜなら賃銀が農業家の全収入にひとしくなるや否や、資本の蓄積はたちまち終りをつけねばならぬからである。この場合、如何なる資本も何らの利潤をうむことができず、したがつて、如何なる附加的労働も需要されず、その結果として、人口はその頂點に達している筈であろうからである。實は、かかる時期よりも遙か手前で、利潤率の甚だしい低下が、すべての蓄積を停止せしめ、労働者に支拂つたあと^{*}、その國の殆んどすべての生産物は、あげて地主と租税・Tithesの收納者の手に歸してゐるであらうと。(Ibid., pp. 120—121) すなわち、利潤が極小となり、労働者に支拂つたあとの一國の殆んど全部の生産物が、土地所有者の

懐にはいる段階を、事實上における社会發展の極限と考えているわけである。したがつて、この叙述のうちから、リカアドオは、利潤が零になる時期を考えうべき極限として定立しては、むしろ、利潤が皆無となるるか手前で、極めて低い利潤率が、すべての蓄積をことごとく停止せしめるとみていることに、注目すべきであろう。彼がその理由とするところは、利潤なくして生活できない農業家や製造家の蓄積にたいする誘因は、利潤の低下ごとに減少し、その利潤が余りにも低く、彼らの資本を生産的に使用するにあつて、必然的に逢着しなければならぬ煩勞と危険にたいして、相當なる報酬を彼らにあたえない時には、それが全く停止するとみるからである。(Ibid., p. 122) かくのごとくにして、資本の蓄積がもはや進行しないとすれば、労働にたいする需要は増加することなく、人口増加も起ることがない。したがつて、ヨリ劣等なる土地に耕作を擴張する必要も生じない。とすれば、穀物の価格はもはや變動することなく、一定點に安定するであろうし、賃銀もこの點で靜止するであろう。(Ibid., p. 176) このような段階における穀物の價値は、労働が投ぜられてから生産物が市場にもたらされるまでの時間の長短によつて影響されないので、その生産に必要な最大限の労働量によつて規制せられ、この點で安定するということができる。ここでとくに問題となるのは、地代であるが、リカアドオによれば、一國の資本が大いに減少し、労働扶持のためにあてられた基金が大いに減少すれば、必ず地代を下落せしめるであろうとみるのであつて、生産的でない地質の土地は、つぎつぎと放棄せられ、生産物の交換價値は下落し、地質の優等な土地が、最終耕作地、すなわち、そのとき地代を納めぬ土地となるであろうと説く。(Ibid., pp. 179) すでにみたごとく、資本の蓄積が停止すれば、人口は労働需要に追及し、賃銀は生活費と一致する筈であるから、土地が利潤の消滅するところまで耕されて、絶對地代が発生するかのごとくであるが、ここでは、もはや人口増加の刺戟がなく、したがつて、永續的に穀物の獨占價格が成立するとはいい難い。

* リカアドオは、さらに、利潤率が下落しても、利潤の總額が、漸減する増加率で、増加すること、資本蓄積が巨額に達して利潤が下落した以後においては、それ以上の蓄積が利潤の總額をも減少せしめること (Ibid., p. 123)、さきに指摘した利潤率低下の例証について、資本の交換價值増大によつて、自らの利潤の計算以上に、利潤がヨリ早く低下すること、(Ibid., p. 122) それ、恐らく如何なる事情のもとにおいても、とうてい六歩—七歩以上の一般的永續的な低下を許さないこと (Ibid., p. 36) を指摘している。

** リカアドオのいう靜止の段階が、Stagnationの段階でないことは自明である。彼は一八二一年七月二日附マルサスへの書簡において、この点を明言している。すなわち、生産の一段の増進への動機が一時的に存在しない事態を指すのに、停滯という言葉は不適當である。事態の進展のうちに、資本の大なる蓄積と増加する人口に食糧を供給する手段の缺乏とから利潤が著しく低下するときは、將來のための動機が失われることになる。しかし、停滯は生じない。生産されたものは、すべて公正なる相對價值をもち、自由に交換される。一時的供給過剰というものがあってもなく、またある特定の貨物が必然的に需要が保証する以上に豊富に生産されるというわけでもないからと。(Works, Vol. IX)

では、われわれは、このように、すべての余剰が地代に吸収される點まで、社会を驅らしめ、靜止の状態にまで導くこの自然的経路から、果して救われることがないのであるか。いま、これをまぬがれる方法、したがつて資本蓄積を持続しうる途を、リカアドオのうちにもとめるとき、そこに見出されるのは、僅かに農業上の改良と緩慢なる作用をなす自由貿易あるのみである。^{*}しかし、もしこれらの農業上の改良・外國貿易によつて、全收穫がたと一倍加しても、賃銀・地代・利潤が同じく倍加すれば、これら三者は相互に以前と同一の割合を保ち、三者は何れも相對的に變化したとはいえない筈である。ところが、リカアドオによれば、これら二つの要因は、或は追加賃銀の減少、或は追加資本の減少を通じて、利潤を騰貴せしめ、(Ibid., p. 132) この面から利潤率低下の法則の貫徹を遅延せしめるように作用し、それを通じて資本蓄積の増加しうる余地をあたえたと説く。まず、前者、農業上の改良についてみるに、リカアドオは、利潤率の低下傾向という重壓が、幸にも、しばしば必需品の生産に關連せる機械における改良によつ

て、またわれわれをして以前に要した労働の一部分を不要ならしめ、したがつて、労働者の第一次的必需品の価格を低下せしめる農業上の発見によつて、防止されている (ibid., p. 120) とみているが、この叙述のうちにもあるごとく、彼によれば、農業上の改良には二つある。すなわち、一つは、土地の生産力を増大せしめるものであり、いま一つは、機械を改善することによつて、ヨリ少量の労働をもつて、その生産物を獲得せしめるものである。 (ibid., p. 80) 彼は、この両者が、原生産物の価格における下落を導くことを認めるが、地代にたいする影響は、必ずしも同様でないとみている。 (ibid., p. 80) このうち、(イ)土地の生産力の増大をもたらず改良とは、ヨリ巧妙な rotation とか、巧みな肥料の選擇のごときのものであつて、この場合には、増加せる一定の人口を賄うために必要なる穀物の分量が、ヨリ少量の土地から獲得されるのであるから、改良がなされなかつた以前に耕されていた限界地から、資本が引きあげられ、その耕作は抛棄され、新たな限界地の肥沃度が高まり、穀物に含まれた労働量は減少し、穀物価格は低下し、各等級の土地収益間の差益としての地代も低下する。 (ibid., p. 78, pp. 80—82) (ロ)農業上の改良のいま一つの場合は、われわれに、その生産物をヨリ少ない労働量をもつて獲得することをえせしめるもので (ibid., pp. 81—82)、リカアドオによれば、これは、農業上の改良が、土地に投ぜられる資本の形成に向けられるものである。例え、牛、打穀機のごとき農業用具の改良・耕作用馬匹の使用における節約・獣醫の技術上における智識の進歩などがこれである。このような改良がなされると、ヨリ少ない資本——労働——が土地のうえに使用され (ibid., p. 82)、穀物価格は下落する。リカアドオは、この場合、地代はあるときは下落せず、或るときは下落するとみ、前者の場合には、資本構成上の改良がすべての部分の資本にたいして一様になされたときであり、後者は、最も不生産的に使用されている資本部分にたいして、それがなされたときであるという。 (ibid., pp. 82—83) 何れにしても、機械・道具・建物における改良、原料生産についての改良は、労働を節約し、われわれをしてよく改良の加えられた貨物を、ヨリ容易に

生産せしめ、(ibid., p. 36)したがつて、穀物價格を騰貴せしめないことによつて、これまでみてきた分配過程の方式に、著しい變化をもたらし、賃銀は騰貴せず、地代も騰貴せず、利潤率は低下しないという事態を惹起すとみてよい。^{***}しかし、このように、人口増加と農業上の改良、すなわち自然力と社会力との闘争が展開される場合に、何れが優越するかということによつて、利潤率低下の法則が、どの程度まで人力によつて左右されうかが決定される筈である。リカアドオが農業上の改良の結果として、或いは、むしろその生産にヨリ少い労働が投ぜられるにいたる結果としておこる原生産物の相対的價格における下落が、自から資本蓄積の増加を促すことを、疑いもなく眞實であるのみ、その理由として、資本利潤が大いに増加されるであろうから、蓄積は、労働にたいする需要を増加し、賃銀を騰貴せしめ、人口を増加し、原生産物にたいする需要を大にし、耕作を擴張するにいたるであろうと説くところからみて、(ibid., pp. 79—80)やがて再び、人口が増加し、利潤率の低下すべきことを豫想していたといえる。^{***}とすれば、リカアドオにとつては、その自然的経路を一時的に攪亂するこれらの農業上の改良が、決してそれを轉向せしめるものではないとみていたといえよう。

* 「低廉なる穀物が資本利潤に及ぼす影響を論ず」という論文において、リカアドオは、次のごとく述べている。「資本にたいする一般利潤は、食物の交換價値の下落によつてのみ高められ、その下落は、次の三つの原因からのみ起りうる。

第一、労働の眞實價格の下落、これは農業者をして生産物のヨリ大なる余剰を市場へもたらさしめる。

第二、農業における、或いは農具における改良、これもまた生産物の余剰を増加させる。

第三、新市場の發見、これは國內で栽培するよりも、ヨリ安い價格で、穀物を輸入せしめる。(Works, Vol. IV, p. 22)しかし、

労働の眞實價格が大部分労働者の主要生活資料たる穀物の價格に依存するとみるリカアドオにおいては、第一の原因を重視しないのである。なお、Lord's Committee on the Resumption of Cash Payments におけるリカアドオの証言は、公共事業が既使用資本を他の分野から吸上げるといふ観点から、公共事業が不況を救いうるものでないと論じている点は、注目されてよいのである。(Works, Vol. V, pp. 434—438)

※ リカアドオが、その第三章機械において、次のごとき結論を導きだしていることは注目されるべきである。すなわち、

「第一、機械の發明・利用は、つねにその國の純収益の増加に導く。

第二、一國の純収益の増加は、總収益の減少と兩立する。

第三、労働階級がいただくごとく、機械の使用は、彼らの利益を傷つけるという意見は、成心や誤謬にもとづくものでなくて、經濟學の正しい原理に合致する。

第四、もし、機械使用の結果たる生産手段の改良が、一國の純収益を、總収益を減少せしめる程度に多く増加せしめたならば、この場合、すべての階級の境遇は改善される。」と。(Ibid., pp. 391—392, p. 42)

※※※ リカアドオは、改良は、地主にとつて、一時不利ではあるが、その結果、人口増加に刺戟をあたえ、ヨリ小なる労働で、ヨリ貧瘠の土地を耕することができるようから、結局、改良の利益は、地主に移されるとみている。なおマルサスは、このような改良とか輸入がなされても、生産が消費を超越すならば、利潤が低下しうることを力説したのである。

利潤率を低下に導く自然的分配過程には、いま一つの阻止的な要因、すなわち、外國貿易の自由と擴張がある。すなわち、リカアドオは、利潤率が賃銀の下落によつてでなければ決して増加されえないこと、また、賃銀が支出されるところの必需品の下落の結果を除いては、賃銀の永續的の下落がありえないこと。とすれば、もし外國貿易の擴張によつて、労働者の食物及び必需品が低下された價格で市場にもたらされるならば、利潤が騰貴することは自明であつて、もしわれわれ自身の穀物を栽培するかわりに、或いは労働者の衣服及びその他の必需品を製造するかわりに、われわれにこれらの貨物をヨリ安い價格で供給されうる新しい市場を發見するならば、賃銀は下落し、利潤は騰貴する筈である。(Ibid., p. 132) リカアドオは、この場合、外國貿易は、収入がそれに費さるべき貨物の數量と種類を増加せしめ、貨物の豊富と低廉とによつて、資本蓄積にたいする刺戟を提供するから、一國にとつて有利ではあるが、輸入せられた貨物の種類が、賃銀のそれに費されるものでない限り、いささかも資本利潤を高める傾向をもたないことを繰返し強調する。(Ibid., p. 133) かくして外國貿易は、まさに農業上の改良と同一の効果を利潤のうえに及ぼ

すことを主張し、もしも低廉なる外國品の輸入によつて、支出の二割が節約されうるならば、結果は、機械がその生産出費を低減せしめた場合と正しく同じであるという。(ibid., pp. 131—132) われわれは、この低廉なる穀物輸入の自由が、ひいて利潤率を騰貴せしめるというリカアドオの思考が、彼の反穀物條令論、自由貿易論の最大の理論的支柱となつてゐることを指摘せねばならぬ。***

* 外國貿易の擴張により、労働者の生活必需品が安價に輸入される結果として、賃銀が下落し、利潤が騰貴する事情は、*Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock, 1815. On Protection to Agriculture, 1822* に詳しく展開されている。因みに、リカアドオの比較生産費を貨幣の本質的機能から分析・批判したものに、新庄博氏の論文「リカアドオに於ける價値尺度」(經濟學研究Ⅰ)のあることをあげておかなければならない。

** ここではリカアドオのとりあげてゐる外國貿易は、二國間の單純な交易であつて、本國・植民地間の投資については考慮されていないことを注意すべきである。

*** 農業上の改良(少くとも短期では)と輸入制限の撤廢とは、地主の利害と相反している。したがつて、利潤が穀物價値にのみ依存するという理論は、地主の利害は、つねに社會の他の階級の利害と相反しているという意味を含んでみるとみてよいであらう。

IV

リカアドオの資本蓄積論の吟味には、なお論じ盡されないところも尠くないであろうが、われわれは、ここで三つの疑問を提出して、一應この拙稿をとどめることとしたい。まず、第一は、リカアドオの資本蓄積論とセイの法則との関連である。リカアドオは、まず「原理」の序文の註において、*J. B. Say's Des Débouchés* の章をとりあげ、彼に賞讃の辭をなげかけ、(ibid., pp. 6—7) また、そもそも需要は、ひとり生産によつてのみ制限されるものであるか

ら、一國內において使用しえられない資本額というものが無いというセイの所説を引用し (ibid., p. 290)、また、生産物は、つねに生産物或いは勤勞によつて購買せられ、貨幣は單に交換をおこなう媒介物にすぎないのであつて、特定の貨物が余りに多く生産されすぎて、それに費された資本を償わぬほどに市場に供給過剰がおこるといふことがたとえあるにしても、これは、すべての貨物についてはありえないとし、(ibid., pp. 291—292) さらに、各人が奢侈的な消費をやめて、資本蓄積のみ熱中するときは、生産必需品の不消化がおこり、その場合には、一般的な供給過剰という現象があらわれるにしても、それを容認したからといつて、一般原理が傷つけられるものではないと説いている。

(ibid., pp. 292—293) これらの叙述は、しばしば、リカアドオ體系において、セイの法則が基本的前提であつたことの證左として指摘されているところである。しかし、リカアドオがセイの法則を重要な原理として援用したことが、直ちに、セイの法則がリカアドオ體系の前提として認められうるであらうか。この兩者の關連をヨリ明確にする鍵は、マルサスとの論争のうちに見出されるようである。リカアドオにとつては、人間の欲望がはてしない限り、有效需要が資本と併行して増大しないといふがごときはありえなかつた。これにたいして、マルサスは、資本蓄積は、有效需要が全供給を吸収できぬほど貨物の供給を増加せしめることによつて、リカアドオの説く以上に、利潤にヨリ直接的に影響するとみた。すでにみたごとく、リカアドオによれば、穀物獲得の困難の増大は、賃銀の騰貴を通じて、利潤を低下せしめる唯一の永久的原因であつたのにたいして、マルサスは、資本の蓄積が、有效需要の滿されざることを通じて、利潤に直接反作用することを強調した。リカアドオのその價值原理は、第一次接近において、需要を獨立變數として考えられうるという假定に立つているが、もし、これをセイの法則と全く同一とみれば、この意味では、セイの法則は、リカアドオ體系において基本的前提であつたといえる。しかし果して、セイの法則をば、このように解釋することが許されうるであらうか。リカアドオが「原理」の第二〇章・第二一章においてセイの法則を援用してい

るところでは、明かに、反対意見を反駁するための好箇の武器として、それをとりあげているのであつて、需要を獨立變數とする假定は、決してそれをもつて、現實世界の需要にまで論及せんとするものではない。われわれの推測しうる程度では、セイの法則のリカアドオにたいする眞の重要性は、一定の貨物量にたいして市場が存在するにすぎないこと、そして、もし、その數量を越えて供給を増加すれば、余剰の處分ができなくなるという通説にたいして、セイの法則がまことしやかな解答をもたらすという事實のうちにあつた。このように解すれば、セイの法則は、リカアドオ體系においては、單なる附加物にすぎないのであつて、リカアドオが利潤論の防禦にあたつて、またマルサスの一般供給過剩理論の攻撃にあたつて、セイの法則を採用したことも理解できる筈である。さらにこの點について、考えられるいま一つの點は、リカアドオが、貨本蓄積の結果としての利潤率の低下法則を導きだしたことから、經濟制度にたいする重要な發言權があたえられるとともに、これを繞る困難な現實問題に直面したのではないか、ということである。もし社会の進歩するにつれて、利潤率の低下する傾向があり、しかも、貨本の蓄積が利潤率に依存するとすれば、このことは必然的に制度それ自體にたいする批判とならざるをえない。たとい靜止狀態が、直ちに到來するものでないとみたとしても、それで問題が回避されるわけでもない。この困難な問題にたいするリカアドオの唯一の解決方法は、自然という經濟外的要因を、その説明の過程に導入することであつた。彼は、いやしくも生活に余裕のある限り、その限度まで増殖せんとする人間をば、耕作の進行するにつれて、生産力の減退する土地のうえにすまわせ、かくして、拘束するものは、自然すなわち土地であり、拘束されるものは、人間すなわち人口であり、矛盾は一つに自然對人間の間にあるとした。このことは、行き詰りを、特定の社会形態にもとめず、あらゆる可能な經濟制度のうちの最善のものでさえ、免れえない要因をとりあげているといふことができる。^{*}したがつて、その靜止狀態は、資本主義の終焉ではなくて、すべてが終局にたちいたり、新局面への展開を許さない人類社会そのものの終末であつ

たともいえよう。しかし、リカアドオのこのような解決は、社会の進歩につれて、無数の失業軍をつくるというマルサス、ことに経済外的要因の作用を強調するマルサスの立場と、さしたる距りをもつものとはいえない。少くとも、この點にまで問題が集約されるにいたれば、もはや兩者の見解には明確な境界線をひく何ものもあたえられていない。とすれば、自説にたいするあらゆる反對を覆さんと焦るリカアドオにとつては、その用いる武器は、ただ相手を攻撃できうるものであれば、何んら選ぶところがなかつたと考えられる。セイの法則がこれらの武器の一つとして、リカアドオによつて選ばれたとみられないだろうか。このようにみていると、リカアドオ體系における基本的前提として、セイの法則をとりあげることには、疑問の余地があるのではないだろうか。^{**}

* われわれは、ここに資本主義經濟の行き詰りを、無限に發展する生産力とこれを拘束する社會制度との衝突にもとめたマルクスの經濟的矛盾論にたいして、それが生産力の減退のために起るとみるリカアドオの自然的矛盾論の立場があるといえる。拙稿、資本蓄積論（小樽商大開學記念論文集第二分冊）参照。

** Meek は、適切にも、セイの法則がリカアドオ體系にとつて重要であつたことはたしかであるが、それは基本的前提であつたのではないとし、ひとりセイの法則の勝利をもつて、リカアドオ以後の經濟思想の歴史を説かんとする試みが決して稔あるものではないと述べている。（Meek: op. cit., p. 52）またハッチソンの見解も、これに近い。（T. W. Hutchison: op. cit., p. 417）

第二は、リカアドオの資本蓄積論と勞働價值原理との關係である。すでにみたごとく、リカアドオのとつた分析の方法・對象については、幾多の難點が認められるにしても、彼の體系が、勞働價值原理を中心に、完全な統一をもち、首尾一貫し、個々の法則は、全體と有機的關係を保ち、渾然たる一個の理論體系をなしていることは、それが、天賦の推理力・思考力にあつたか、株式仲買人としての彼の經驗の産物であつたかは別として、彼の經濟的思索が、十九世紀に重きをなした所以でもあろう。すでに指摘したごとく、リカアドオ自らは、あるところでは、「分配論」と勞働價值原理との間に關係なきことを明言しているが、彼の動態的分配理論の構成を可能ならしめたものとして、

労働価値原理のもつ意味を否定できない。^{*}リカアドオの動態的分配論において、その中核をなすものが、利潤率低下の法則であることは、すでにみたごとくである。この法則について、とくに、さきに指摘した一八一四年一二月一八日のマルサスへの書簡の一部から窺われることは、リカアドオの資本蓄積論が、實は利潤論のうえにたてられていること、しかもそれが直接、彼の価値原理に基礎づけられているという點である。その価値原理は、第一次接近として、需要を獨立變數として考えるという假定にたつている。このことは、リカアドオ理論とセイの法則との関連を思わしめるものではあるが、もし假に、利潤が賃銀の變動以外の要因によつて影響されるということ認めるとすれば、リカアドオの全理論體系は、崩壊せねばならぬのではなからうか。このように考えてくれば、兩者の密接なる關係は、すでに多言を要しないであろう。しかし、いまかりに、この兩者の不可分の關係を認めるにしても、このことが直ちに、リカアドオの労働価値原理の優越性を證明するものでは斷じてない。その後のイギリス経済学におけるリカアドオ経済学の衰退のあとを顧みるとき、その原因はむしろ、その理論によつてもつてたつていられるといわれるセイの法則の面にあるのではなくて、この労働原理の面にあつたとみたい。近代的分析方法の進められるにつれて、價值論は不必要であり、すべての命題は、單に經驗的な價格理論をもつて處理できるとされ、労働原理の衰退とともに、それを唯一の支柱とするリカアドオの経済学も、徐々に衰退の運命を辿つていつたとみてよい。リカアドオが病歿の日まで異見者との論争を怠らず、悩み續けて執着していた労働原理も、近代的な視角からすれば、粗野にして偏狭なものといえよう。^{**}資本蓄積についても、リカアドオの説いたように、それが二つの起動力、すなわち、資本と人口の増大によつて、もたらされるといふ機械的な決定論は、捨てて顧みられず、有效需要の原理を中心とする資本蓄積論をもつて、近代理論のあるべき姿と考えられている。^{***}しかし、われわれは労働価値原理とともに、リカアドオの動態理論のもつていた二つの側面、すなわち (Theory of motive power) と (Theory of progressive redistribution) ^{****}

を捨てて顧みないですまされるだろうか。もし、不幸にして、ドツブの指摘することく、^{*****}これまでの經濟學者が機械論的均衡の概念を現實におしつけたと同様に、今日の經濟學者が indeterminacy を、思想によつて現實におしつけつつあるとすれば、われわれとして、かかる状態に安んじて満足することができ得るであろうか。

* ドツブによれば、勞働價值原理の意義は、生産過程でなされる最初の Value-contribution にたいして、それが生産物の最終の價值とは異つた大きとなりうるという意味において、量的意味を與えた点にある。もし消耗されたものを置かえるために必要な勞働が、全生産物中に体化されている勞働よりも少なければ、surplus が發生する。この場合、決定的な問題というのは、この余剰が果して生産的寄與に比例して分配されるか、それとも全く生産的寄與をなさない階級がそれを併合するか、もし後者なれば、その方法と理由は那邊にあるか、という点にある。(M. Dobb; op. cit., p. 32)

** Schumpeter は、リカードの方法論を、次のごとく解釋している。すなわち、Thünen を惱ました經濟學体系の諸要素の相關關係についての包括的なビジョンは、リカードオにとつては、恐らく一時間の假睡にも値しない。リカードオが關心を抱いたのは、直接的・實際的な重要性をもつた結論を明確に引き出すことであつた。このために、彼は体系一般をばらばらに裁斷し、その大きい部分を束にして、できるだけ多くのものを所與とするために、それを冷蔵庫に入れた。かくして單純化された假定を積み重ねていくのであつて、ついにはただ二・三の總体的な變數がのこることとなる。彼はこれらの假定を一定として、變數のうちから、結局において自分の希望していた結論が、tautology として、出てくるような單純な一面的な關係をもうけるのである。例えば、有名なリカードオ理論は、利潤が小麦價格に「依存」するというにあるが、彼の暗然の假定にたつにしても、また彼の獨特の意味においても、これは眞實でないのみならず疑もなく事實上つまらないものである。すべて他のことが所與とされ、すなわち凍結されているのであるから、恐らく利潤は、他の何ものにも依存されないであろう。それは論駁できない理論であるが、このような性格をもつた結論を、實際問題の解決に適用するやり方をわれわれは、Ricardian Vice とよぶであろう。」と。

(Quarterly Journal of Economics, 1951, p. 160)

*** ハロッドは、古典派体系における二つの命題、すなわち、人口原理と土地收穫遞減の法則を棄てうるとみている。(R. F. Harrod; op. cit., p. 20)

**** R. F. Harrod; op. cit., p. 18.

**** M. Dobb: op. cit., p. 219.

第三は、以上の諸點と密接に關連するものではあるが、リカアドオの資本蓄積論が抽象化された *neutral monetary economy* を中心とするという點である。もともと、通貨問題について、深き關心を抱いていたリカアドオが、このような立場をとるにいたつたことは、マルサスが現に生活しつつある貨幣經濟をつねに念頭に考へていたの^{*}にたいして、極めて對照的であるといわねばならぬ。利子論の叙述が斷片的であるのみでなく、^{**}これまで述べてきた資本蓄積論においても、つねに貨幣價值を不變とする前提のもとにたつていた。しかし、リカアドオ自らは、貨幣價值の變動を全く無視しているわけではなく、自らの労働價值原理の修正される一つの事情として、これを取扱つている。にもかかわらず、貨幣價值變動のもつ意義は、理論の展開過程においては、ややもすると無視され、例えば、貨幣貸銀の騰貴が、しばしば貨幣價值の下落によつて惹起されるにしても、この場合に、労働及び一切の貨物は、その相互關係においては變動せず、したがつて、利潤にたいしては、何らの影響をもたないと説く。かくして、貨幣價值の内容・變動の原理は、(ibid., pp. 142—145) 労働價值原理といささかの關係もない貨幣數量説に轉化されている。例えば、一國における貨幣の減少と、他國におけるその増加とは、すべての價格に作用するとし、(ibid., pp. 139—140) また、貨幣量の附加せられることなくしては、一切の貨物が同時に騰貴することはおこらぬとし、(ibid., p. 105) また、過剰といふこと以外に貨幣の *depreciation* はありえず、鑄貨はいかに *debase* されても、もしそれが甚しく過剰でない限り、*mint value* を維持し、金塊の *intrinsic value* で流通するとし (Works, Vol. III p. 225) さらには數量がすべてのものの價值を左右することは、穀物・通貨その他のすべての貨物にとつて眞實であるが、恐らく他の如何なるものよりも通貨にとつてヨリ眞實であると説く。(Works, Vol. V p. 209) このように、労働價值原理にたちつつ、しかもなお貨幣について、數量説をとるといつたりリカアドオの理論的立場は、既に指摘したごとく、彼の價值尺度論

の不徹底さにもとづくものと考えられることもできる。なぜなら、価値尺度の理論が、貨幣單位の一般的購買力という内容で考えられる場合には、貨幣單位の価値は、その基礎理論としての労働価値原理から離脱し、別箇の説明を要するのであつて、かくして、貨幣はただ交換手段としてとりあげられ、その數量が物價を一律に上下せしめる働きをもつこととなつたからである。リカアドオをして、貨幣ヴェール觀のもとに、實物經濟を中心とする理論構成に安んぜしめたのは、このようなところにあるといつてよい。しかし、この面の考察の不徹底さを追及して、マルクスの試みたごとく、価値尺度としての貨幣が、商品の内在的価値尺度たる労働時間の必然的な現象形態であるとみれば、^{***}一應の解決はできるであろう。しかし、果してマルクスのいうがごとき實物經濟的な資本蓄積論をもつてすれば、現實の貨幣經濟が認識されつくすといはれるであろうか。

* リカアドオの最初の關心が、通貨問題であつたことは、一八〇九年に、Morning Chronicle に掲載された論文 The Price of Gold (Works, Vol. III) が彼の處女作であつたことからも明かである。ここには、銀行券發行額の收縮によつて、金紙間の價格差を消滅せしむべしとを説いたのてあるが、さらに、一八一〇年二月一日には、The High Price of Bullion, a Proof of Depreciation of Bank Notes (Works, Vol. III) と題する單行本をあらわし、地金の騰貴というのは、正確を缺くものてあつて、實際に價值が變動したのは、銀行券であるのみ、銀行券の價值下落は、その發行額が過大なるためであり、發行額が過大に上るのは、英蘭銀行がその發行銀行券の兌換義務を免除されているからであるとした。さらに、一八一六年には、Proposals for an Economical and Secure Currency, with Observations on the Profits of the Bank of England, as they regard the public and the proprietors of Bank Stock (Works, Vol. IV) を發表し、紙幣をもつて正貨に代用するの利益と、通貨と本位金屬との等價を維持するの利益とを、あわせおさめるためには、紙幣を兌換するに正貨をもつてせず、地金をもつてすべきことを提案した。(Works, Vol. IV p. 66) これらの要旨は、「原理」の二七章、通貨・銀行論に要約された。

** 利率と資本蓄積との關連について、リカアドオのいうところは、つぎのごとくである。すなわち、低き利率は、大なる資本蓄積の徴候であるけれども、また低き利潤率の徴候、また一國の富と資源との増進をゆるさぬ静止狀態への進行の徴候でも

ある。そもそも一切の貯蓄は、利潤からなされるものであるから、また一國は急速に進歩の状態にある場合に最も幸福なのであるから、利潤と利子は、高すぎるといふことはありえない。地主が土地を抵當に資金を調達する場合の犠牲が減少するということは、實に一國にとつて低き利潤と利子にたいする貧しき慰藉である。一國の繁榮と幸福に貢献するものにして、高き利潤にまさるものはない。(Works, Vol. IV pp. 234—235)

*** K. Marx; Das Kapital, Bd. I S. 99 なやリカンドホの資本蓄積論についてのマルクスの批判は、Theorien über den Mehrwert, Bd. II Teil II Kap. III Akkumulation von Kapital und Krisen に詳論をわづらる。

(一九五四・一・二八)